

池田上原古墓

～個人墓新築に係る緊急発掘調査報告～

Ikeda-Uehara Tomb

-A Report of Excavation Resulting from Personal Tomb Construction-

西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター

Nishihara Board of Education / Okinawa Prefectural Archeological Center

ABSTRACT: The Ikeda-Uehara tomb was discovered in 2004 in the process of new tomb construction, and was excavated for the purpose of data recovery. The tomb is so called 'Fincha Tomb', dug into a sandstone layer, with its entrance sealed with piled stones. The chamber is furnished with three high shelves along the back and side walls where two stone urns and three ceramic urns were placed. In the course of the excavation, smoking pipes and hairpins were found in good condition, as well as skeletal remains in the urns. The Ikeda-Uehara tomb represents the tomb style of Pre-Modern and Modern periods in Okinawa. This paper presents the results of the excavation.

目次と文章担当

1.はじめに	（片桐）	2
2.調査に至る経緯		2
1) 調査に至る経緯	（玉那霸）	2
2) 調査体制	（玉那霸・片桐）	3
3) 調査経過	（片桐）	4
3.遺跡の位置と環境	（玉那霸）	4
1) 地理的環境		4
2) 歴史的環境		6
4.遺構	（片桐）	10
1) 立地と調査経過		10
2) 形態的特徴		10
3) 蔵骨器の配置と様相		10
5.遺物		24
1) 蔵骨器	（片桐）	24
2) 煙管	（崎原）	25
3) 簪	（宮平）	26
4) 指輪	（崎原）	26
5) その他	（片桐）	26
6.銘書判読	（井伊）	38
7.人骨調査	（土肥）	38
8.まとめ	（片桐）	38

1. はじめに

本報告は平成16年度に西原町教育委員会が主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センターが協力をして実施した池田上原古墓の発掘調査成果をまとめたものである。発掘調査は平成16年11月16日～11月26日まで、資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて平成16・17年度に実施した。

事業の実施にあたっては、沖縄県教育庁文化課の島袋洋氏（当時、係長）、中山晋（専門員）、沖縄県立埋蔵文化財センターの安里嗣淳（当時、所長）、盛本勲（当時、調査課長）から貴重な御助言や御指導をしていただいた。

現地調査で得られた遺物や実測図・写真・画像デジタルデータ等の各種調査記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管しているが、本紀要の刊行後は西原町教育委員会にて保管する予定である。

2. 調査に至る経緯

1) 調査に至る経緯

平成16年9月9日、西原町字池田上原813-1の土地において墓地造成工事中に、小波津敬氏（字小波津406）によって古墓が発見され、2004年（平成16年）9月10日、西原町行政オンブズマンの玉那覇三郎氏を通じて遺跡（古墓）発見の連絡が生涯学習課文化財係に入った。

当該発見遺跡の今後の取り扱いについて、西原町の文化財保護審議委員である當眞嗣一氏（沖縄県立博物館長）に相談した結果、県教育庁文化課の指導を受けるよう助言された。9月14日、県教育庁文化課記念物係を訪ね、島袋洋氏（当時、係長）、中山晋氏に池田地内発見の遺跡の現場合同調査を依頼し、同日、午後4時から午後6時までの間、字池田地内発見の遺跡（石棺等）の合同現場調査を実施した。当該調査後、沖縄県教育庁文化課から文化財保護法第57条の5の規定に基づく届出並びに遺失物法に基づく警察署への届出等についての事務手続きについて指導を受けた。また、当該遺跡の発掘調査について、技術的支援並びに合同調査を県文化課に要請したところ、「発掘調査のための経費（50～60万円程度）」を予算措置するようにとの指示も受けた。

当該発見の遺跡については、発見者が個人であること、また、墓の建設工事に關係していることから、ウンジチ（閏年）である年内に墓建設を完了しなければならない（沖縄の風習）など特殊事情等があつたので、記録保存のための緊急発掘調査として対応の検討を重ねた結果、町単独の予算を確保して、沖縄県教育庁文化課の指導に基づく県立埋蔵文化財センターの支援協力を得て、発掘調査を実施することが決まった。

その後の経過概要は以下のとおりである。

- 9月15日、当該遺跡発掘調査費の予算計上の説明のため、波平常則西原町教育長を遺跡発見現場へ案内し状況を確認させる。
- 9月15日付け、遺跡発見者的小波津敬氏（字小波津406）、文化財保護法第57条の5の規定に基づく「遺跡発見の届出」を西原町教育委員会へ提出する。
- 9月16日付け、西教生第386号により「遺跡発見の届出」を沖縄県教育委員会（教育長 山内彰）へ進達する。
- 9月27日、県教育庁文化課記念物係 島袋洋氏（係長）へ予算計上のための見積（遺跡調査）資料の提供を電話で依頼する。生涯学習課文化財担当、当該遺跡発見場所付近について台風21号による影響での土砂崩れの有無を確認調査する。
- 10月6日、9月29日付け教文第857号による、沖縄県教育委員会からの遺跡の発見についての回答文書を受理したので、同日付け、西教生第429号により、小波津敬氏（字小波津406）へ遺跡の発

見についての回答文書を伝達する。

- 10月22日、生涯学習課長（呉屋），文化財担当で、発見遺跡の調査に備えるため発掘道具の保管状況を確認する。
- 10月22日、生涯学習課長、文化財担当で沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長 盛本勲氏に面会し、支援ならびに助言を求める。
- 10月22日、生涯学習課長、文化財担当で遺跡発掘調査に必要な道具の価格調査を行なう。
- 10月25日、西原町池田自治会長 喜屋武光廣氏に対して、発掘調査作業員3名の斡旋を依頼する。
- 10月26日、県教育庁文化課記念物係 島袋洋氏へ遺跡調査のスケジュールを電話で確認するが、計上予算を基に、沖縄県立埋蔵文化財センターと調整したいとの回答を受ける。
- 11月2日、県教育庁文化課記念物係 中山晋氏が本町生涯学習課を訪ね、遺跡調査の進め方について確認された。同日、文化財担当から県文化課の中山晋氏に同行をお願いし、沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長 盛本勲氏に遺跡調査への協力を依頼する。
- 11月4日、文化財担当、沖縄県立埋蔵文化財センター盛本勲調査課長で遺跡発見現場の状況を確認調査する。
- 11月11日付け、西教生第511号により、遺跡調査に係る埋蔵文化財専門職員の派遣方について、沖縄県立埋蔵文化財センターへ依頼する。
- 11月12日付け、埋文第393号により、沖縄県立埋蔵文化財センターから遺跡調査に係る埋蔵文化財専門職員の派遣方についての回答文書が届く。この回答により、遺跡調査は平成16（2004）年11月16日～11月26日の間、沖縄県立埋蔵文化財センターから派遣された専門員の指導の下、実施されることになる。

2) 調査体制

発掘調査は沖縄県立埋蔵文化財センター及び独立行政法人琉球大学医学部解剖学第一講座の協力を得て西原町教育委員会が主体となり、平成16年11月16日（火）～平成16年11月26日（金）まで実施した。調査体制は以下のとおりである。

事業主体	西原町教育委員会	教育長職務代行者	糸数 善昭
事業事務	生涯学習課	課長	呉屋 清
	〃	文化財係長	玉那霸 力
	〃	嘱託員	喜屋武 肇
調査指導	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課長	盛本 勲
	琉球大学医学部解剖学第一講座	助教授	土肥 直美
調査員	西原町教育委員会	文化財係長	玉那霸 力
	沖縄県立埋蔵文化財センター	専門員	片桐 千亜紀
	〃	〃	比嘉 尚輝（臨）
	〃	嘱託員	崎原 恒寿
調査協力	西原町教育委員会	主 事	島袋 智之
	沖縄県立埋蔵文化財センター	嘱託員	宮平 真由美

発掘調査作業員

伊波行常、喜屋武光廣、比屋根和徳、与那嶺良二

資料整理協力者 沖縄県立埋蔵文化財センター

新垣利津代, 上原美穂子, 大村由美子, 萩堂さやか, 久保田有美, 国場のりえ, 崎原美智子, 平良貴子, 比嘉孝子, 比嘉登美子, 比嘉尚樹, 譜久村泰子, 又吉純子,

3) 調査経過

発掘調査は平成16年11月16日より開始した。池田上原古墓は個人墓新築のため、バックホウによって岩盤を削りだす途中、岩に穴が空いて発見されたという。古墓は砂岩の岩盤に掘り込まれるフィンチャーモードで、地滑りによる土砂によって完全に埋没しており、地元の人々でもそこに古墓があったことは知らなかったようである。まず、周辺の伐採等清掃から始めた。その結果、土砂が厚く堆積しており人力による掘削では長時間が必要とすることがわかった。そのため、バックホウによって土砂の大部分を掘削した。その後、壊れた天井から入り墓内の掘削を行った。墓内は思った以上に棚が高く、入口全部が土砂で埋まっていたため多量の土を掘削したが、墓内が狭いためスコップを使うことができず、時間のかかる地道な作業となった。墓内の掘削によって内側から入口とその厚さを知ることが可能となり、そこを目印に外側の掘削を開始した。岩盤が固い砂岩だったため、スコップによって土砂の掘削を行い、外側の入口や前庭部を検出した。前庭部の検出中に瓶が1点出土した。入口は石を積み並べており、裏込として礫を詰めさらにクチャを張っていた。墓内は正面と左右に高い棚があり、左側の棚にはボージャー1基と小さな沖縄産陶器壺1基が、正面の棚には石厨子2基が、右側の棚にはボージャー2基、マンガン1基が安置されていた。墓内の清掃を行った際に、正面の棚から煙管と小杯がそれぞれ1個出土した。墓内の清掃後、平面及び正面と左右の立面の実測、写真撮影を行った。

発掘調査終了後、調査記録や遺物等を沖縄県立埋蔵文化財センターに搬入し、資料整理を開始した。すでに平成16年度の資料整理計画が決まっていたため、年度内に報告するのは難しかったため、平成17年度にも引き続き資料整理を実施して、年度末に執筆・編集を行い報告した。

3. 位置と環境

1) 地理的環境

西原町は、沖縄本島中部南端の東海岸側に位置し、その北端が北緯26度15分12秒、南端が北緯26度12分24秒、東端が東経127度47分30秒、西端が東経127度44分6秒である。東西約5.8キロ、南北約5.1キロで、面積が約15.57 km²。北は中城村・宜野湾市と、西は浦添市・那覇市と、南は南風原町・与那原町と接し、東は中城湾に面する。

地形的には、低地部と丘陵部に大別される。低地部は、中央部で若干丘陵部に食い込んでいるが、大体町の東半分を占め、小波津川をはじめ数本の川が東へ流れているが、大きな川はない。また、各川とも勾配は極めて小さく、したがって流れもゆったりしている。

掛保久・小那覇集落の東には旧日本軍の飛行場があった。さらにその東側の海岸には、昭和40年代に公有水面の埋め立てによってできた土地がおよそ666,027 m²（南西石油株式会社敷地部分）あり、さらにその南側隣接海岸部分には平成8年4月以降着工（マリンタウンプロジェクト=MTP）された124ha（西原町部分は60ha）による広大な埋立て地がある。

丘陵部は、ほぼ町の西半分を占め、シルト質泥岩や砂岩を主とする新第三紀島尻層群が広く分布し、その岩質から盆状谷（丘陵地を刻んだ谷幅の広い浅い谷）の発達がみられ、その谷底には基盤岩の風化土壌（方言名・ジャーガル）が堆積している。丘陵地にある坂田小学校付近には、東流する川の流域と西流する川の流域との境界（分水嶺）が通っており、その最も低い標高はおよそ70メートル程で

ある。与那原町との境界をなす運玉森は、標高158.1mと高くない山ではあるが、山の形の美しいことで広く県民に知られている。また、去る沖縄戦では日米両軍の間で激しい攻防戦が行なわれた場所としても知られている。丘陵と低地の境界は急斜面地からなり、両者の境界は現地においても明確に区別できる。

町内では長期にわたる気象観測は実施されていないので詳細な気候状況は不明であるが、隣接する那覇市において長期にわたる気象観測が行なわれている。本町より数キロ離れた場所での観測であるがその気候状況は、本町にもほぼあてはまると考えられる。那覇市に所在する沖縄気象台が気象観測したデータをまとめたのがある。（1961年～1990年の平均値、風速は1975年～1986年平均）月平均気温が25度以上の月が6月から9月まで4ヶ月も続き、特に7・8月は28度を超えている。5月から9月までの相対湿度は79%以上もあり、夏はかなり蒸し暑いといえる。一方、最寒月である1月の平均気温は16.0度で、冬でも暖かいといえる。また、各月の平均風速をみると4.0m以上あり、その結果、夏の蒸し暑さが幾分やわらぐが、冬は気温の割には冷たく感じられるようになる。

年平均降水量は2,000mmを超えており、かなり多い。各月とも雨は多く降っており、最少雨月の2月でも100mm以上ある。特に、梅雨期の5・6月と、台風の影響を受ける8月に多く降る。沖縄の降雨の特性としては、年平均降水量は多いが、年によるばらつきが大きい。降雨量は、5・6月の梅雨期、8月の台風期および10月上旬の秋雨前線南下の時期に集中し、しかもこれらの時期には豪雨が多い。また、雨域が狭いために観測記録に残りにくい雷雨やスコール性降雨も多い。さらに、沖縄の雨は雨滴が大きいこと、強雨型（6mm／10分以上）ほどより大きな雨滴が多くなるという（翁長1969）。

西原町内の植物分布をみると、丘陵地・低地ではヤブニッケイ・タブなど、丘陵地および斜面地ではリュウキュウマツ・オオバギ・アコウ・アカギ・ハマイヌビワ・ガジュマルなど、海岸付近にはイソフサギ・シマハママツナ・ハマササゲ・グンバイヒルガオ・クサトベラなど、人工改変地ではギンネム・タチアワユキセンダングサ・アフリカヒゲシバナなどが見られる。

集落の立地をみると、古い集落の大半が低地と丘陵の境界付近に立地しており、これらは水および耕作地の確保の上から有利な位置を選定した結果だと考えられる。町の中央部に位置する低地帯は、水田からサトウキビ畑へと変化はしているが、王府時代から現在まで常に本町における農業生産の中心地であることからも理解できよう。一方、丘陵地にある上原集落は、気象面（霧が多発）や水の確保の面で古い集落に比較して条件的に厳しかったと推察される。上原集落付近の本格的な開発は、1970年代後半に琉球大学が移転してきて以降であり、1985年（昭和63年4月20日設計の概要の認可）に土地区画整理事業（上原棚原土地区画整理事業）が導入された後は、当該集落付近の開発が一層加速された。町内には、北と南を結ぶ2本の幹線道路（国道329号線、県道29号線）と東と西を結ぶ2本の幹線道路（県道38号線、県道宜野湾西原線）の計4つの主要幹線道路が通っている。北と南を結ぶのは、東側を通る国道329号線と西側を通る県道29号線である。国道沿いおよびその東側には事務所、工場および製油所など事業所が数多く立地しており、町内でも最も工業開発の進んだ地域である。県道29号線は、道路拡幅や歩道設置などの整備が行なわれた結果、那覇市周辺地域の都市化現象の顕在化もあって、近年その道路沿いの開発が急速に進んでおり、特に県道38号線との交差点付近（県立西原高校付近）の開発は急激である。また、県道宜野湾西原線の敷設により、県道29号線との交差する付近から上原・棚原・坂田地区あたりへの開発は、町内でも最も住宅等の建設が著しいところであり、上原・棚原土地区画整理事業の効果で都市的住環境のまちへ大きく変容している。

2) 歴史的環境

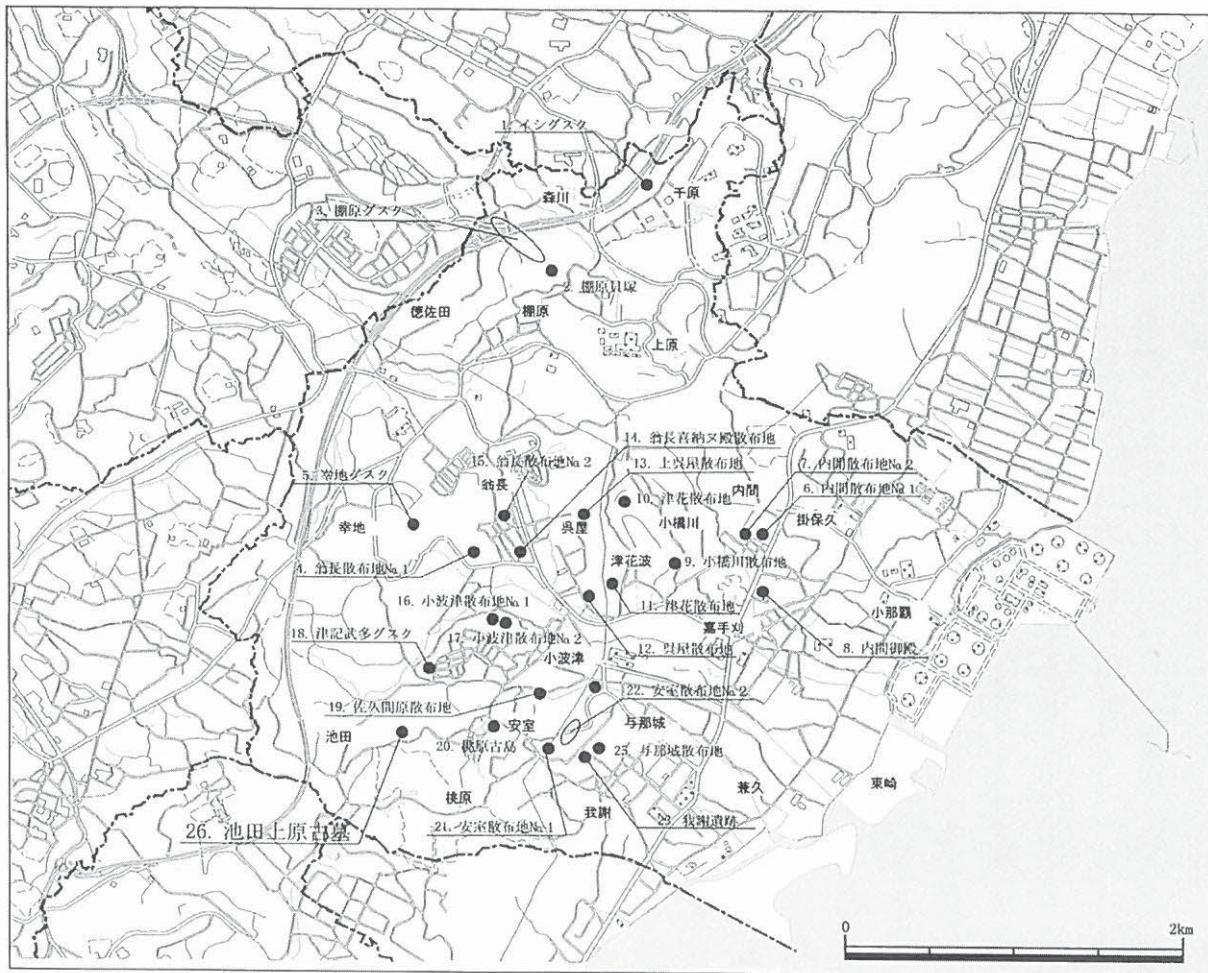
池田上原古墓群が所在する西原町は、古くは西原間切として広域に及んでいたとされる。「にし原」の意は北原とされ、広く中頭方面を指して称していたとされる。さらには南原に相対しての名称であったとともに、首里畿内の北境の一角を形成していた村であったと記録されている。特に首里周辺に近接して位置する真和志・南風原・西原の各地域は「古くは首里三平等と呼ばれた地域であった」とされている。

村落の構成においても、各時期において間切内への編入出の変遷をたどっており、「17世紀中期ごろには、津堅島・あめく村・めかる村・泊村」と、実に現在の2市（那覇市・うるま市勝連）の一部までをも広範囲に包括していたとされる。また、西原間切は、その地域を広く覆っている肥沃なジャガル土壤地帯を有していたことから、早くから田畠の農業生産の地として位置づけられていたことがわかる。首里に隣接した地域の一つであることも起因したと思われるが、早くから、首里王府の直轄領に組み込まれていたといわれている。このように西原という地域が古くから、よく知られた地域として、幾多にわたる歴史の流れの中に村落の変遷をたどっていった跡が分かる。

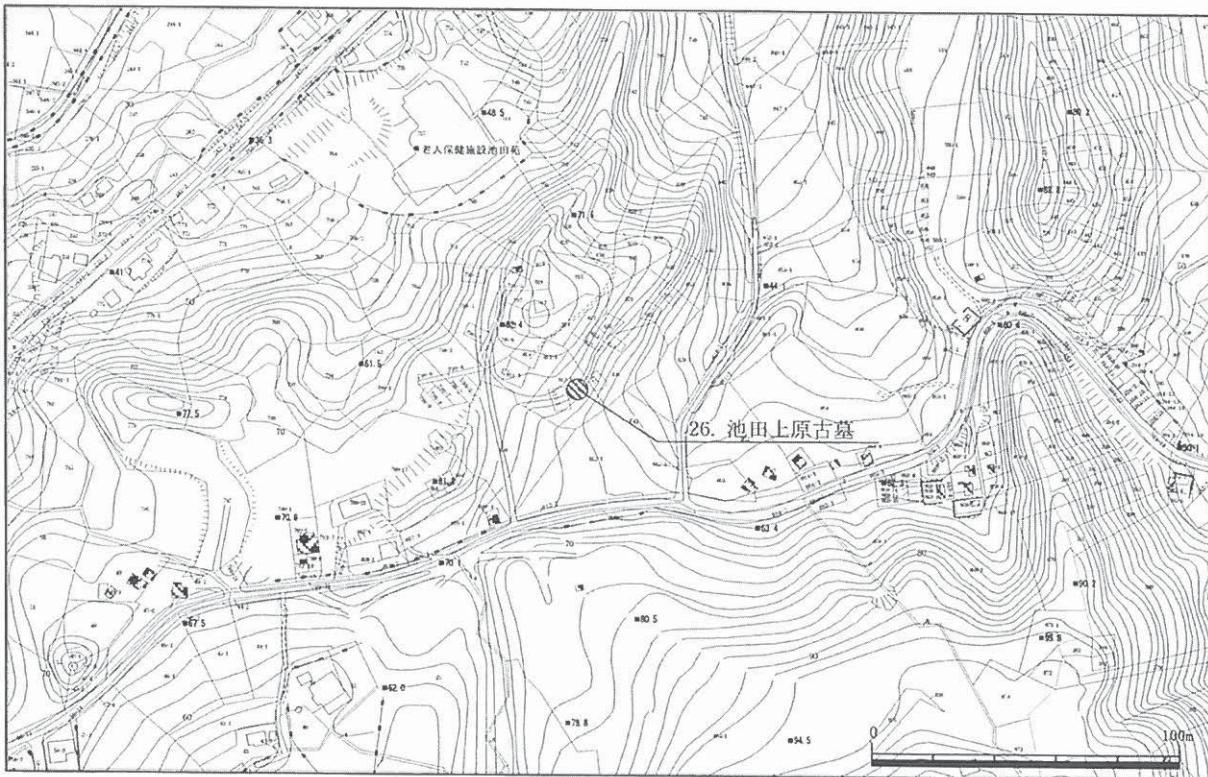
ところで、この西原地域に最初の人間活動の舞台として遺跡が形成されるのは古く、沖縄貝塚時代の前期後半の時期にまで遡りうる。表面踏査の段階ではあるが、現在の棚原集落の北東方に位置する棚原貝塚で確認することができる。しかし実質的に、この西原地域が広域的に有効的に利用されていくのは、やはりグスク時代へ入ってからで、西原平野に広がるジャガル土壤地帯の開墾政策の始まりにもあるとされている。グスク遺跡として呼称されている中には、イシグスク、棚原グスク、幸地グスク、チキンタガスク等が存在する。現在までに確認されている遺跡の90%までが、歴史時代で中世～近世へかけての形成されたものである。小集落が点々と散在していたと考えられる。

また、西原町嘉手苅においては、第二尚氏の祖である尚円王の旧宅として知られる内間御殿の屋敷跡が存在する。東西の二殿（東江、西江）からなる。東江御殿はサンゴ石灰岩を素材として周囲を石垣で築いてある。東殿周辺からは、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦など赤色瓦と灰青色瓦の二種類が採集されている。近世期の沖縄産瓦とされている。

古く沖縄の歴史の流れの中に、首里王府との関連で、西原一帯が強力に関与していた地域の一つであったことが、ここにおいても確認できる。内間之御殿由来記に関する記録として中山家文書の中に見ることができる。



第1図 西原町の遺跡分布



第2図 池田上原古墓の位置



写真01. 古墓遠景（調査前）

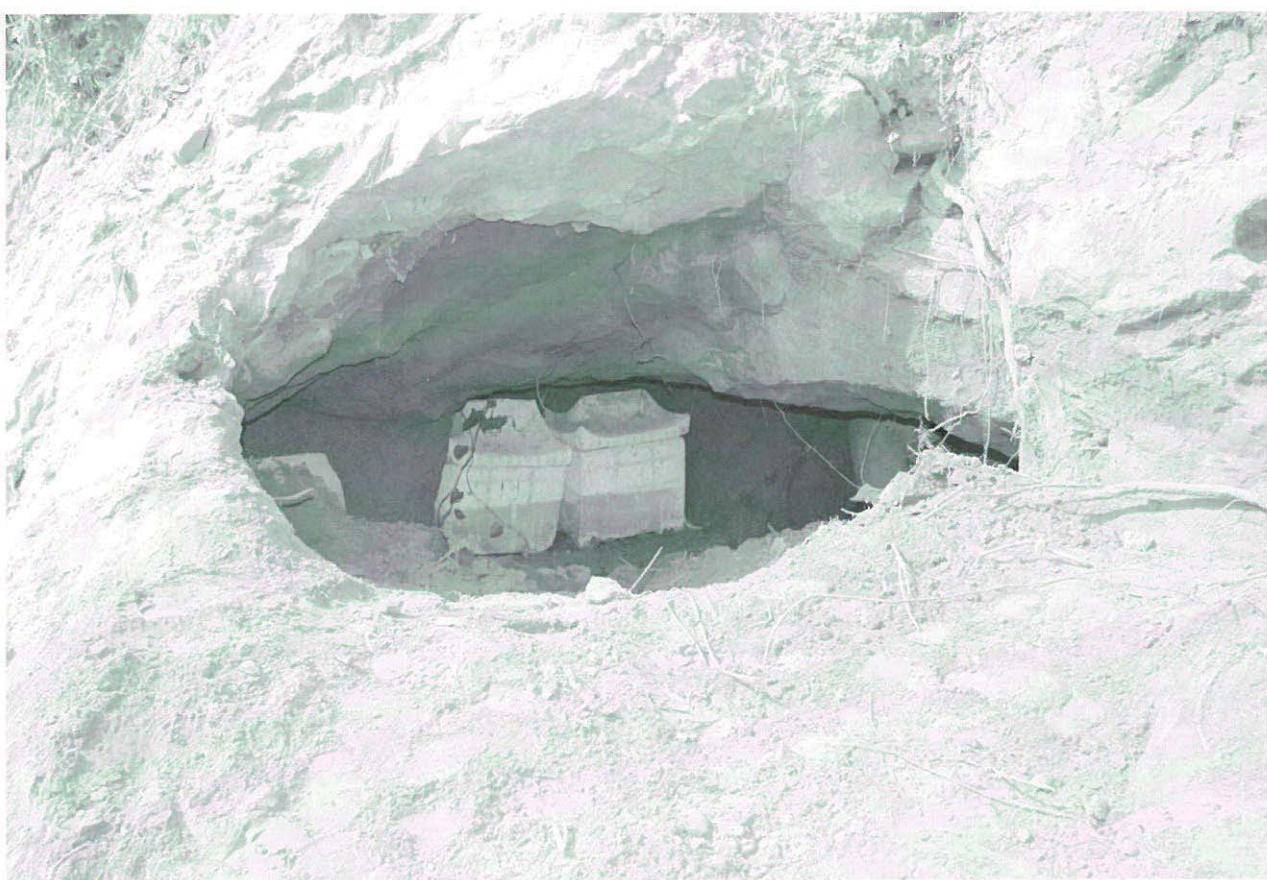


写真02. 墓室（調査前、破損した天井より）

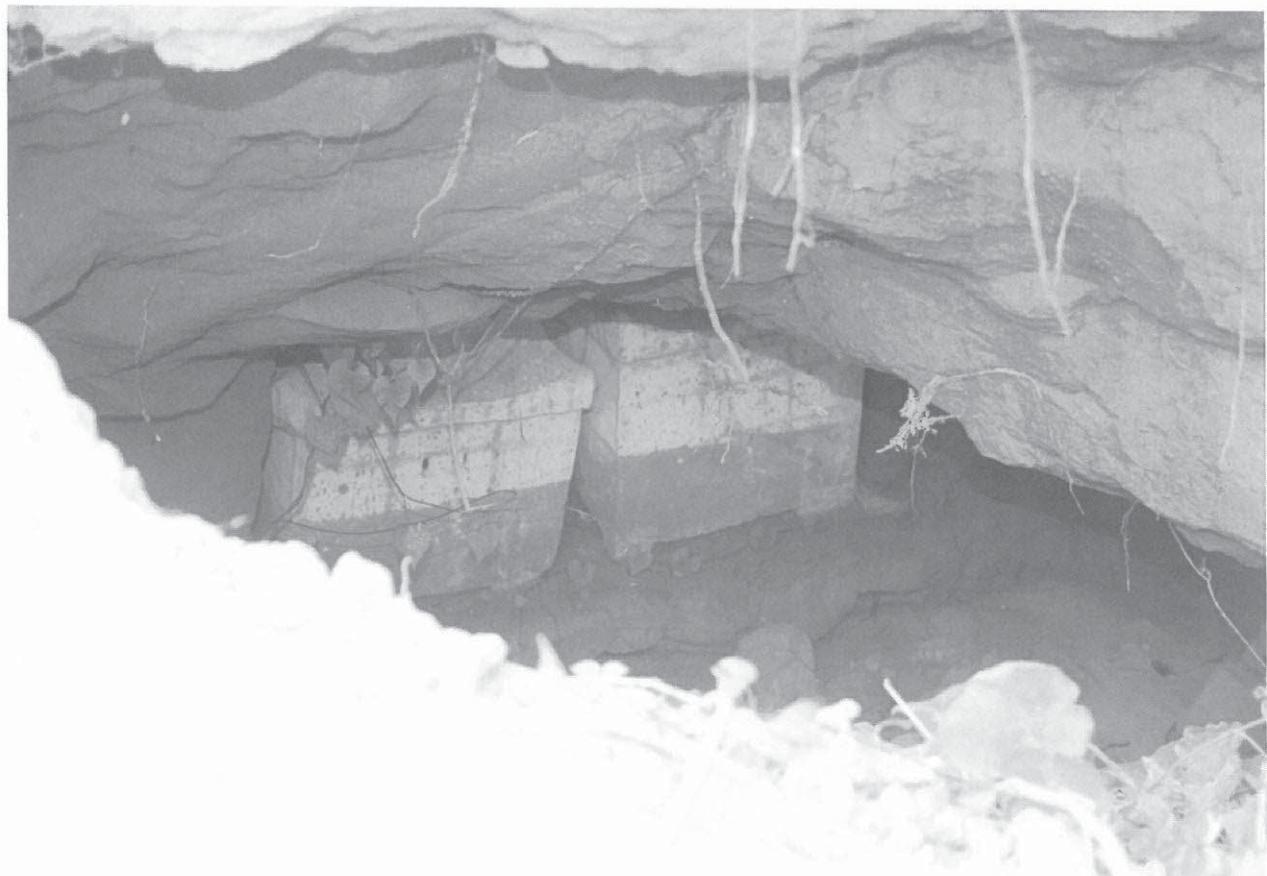


写真03. 正面棚（調査前）



写真04. 右棚（調査前）

4. 遺構

1) 立地と調査経過

池田上原古墓は微粒砂岩（ニービ）を基盤とする丘陵斜面に構築された掘込墓（フィンチャー）である。個人墓建設のためバックホウによって丘陵を掘削していた際、丘陵に穴が空き、古墓が発見された。発見されるまで土砂によって完全に埋没していた古墓であり、発掘調査前はどのような形態の古墓なのかわからなかった。発掘調査前に現地確認をしたところ、バックホウによって空けた穴は墓室の天井であり、墓室にも多量の土砂が詰まっていることがわかった。まず、外面を確認するため土砂を細心の注意を払いながらバックホウによって掘削し、最後は手堀りによって検出した。墓室の土砂は天井の穴から搬出し、墓室から入口を確認した。

2) 形態的特徴

丘陵斜面を側面垂直三角形状に切り取って前庭部を設け、平面方形状に切り取って袖部を設けている。前庭部からは沖縄産陶器の瓶が1点出土した。正面形態は半裁された橢円形状を呈する。

入口は前庭部より一段高い作りとなっており、下部にはさらに多数の石を置き、一番上には方形の大きな石を配置する。前庭部と入口の段差が高いため、前庭部の入口下にさらにもう一つの石を配置し、階段状の作りとする。入口に配置された石の裏には裏込めのように小礫が混ざる粘土（クチャ）を充填している。

墓室の平面形（シルヒラシ）は入口を頂点とした五角形を呈することから、方形に構築しようとした意識が見られる。墓室正面及び左右には立方体に掘り抜いた出窓状の棚が設けられている。棚は比較的高く、約1m程である。墓室の至る所に粗い鑿痕が残っていた。

安和氏による編年では、棚が比較的高い出窓状の形態は2b類となり、古い段階に属する形態である（安和・仁王2005）という。

3) 蔵骨器の配置と様相

蔵骨器は正面及び左右の棚から合計6基確認された。正面棚には石厨子が2基（左側を蔵骨器1、右側を蔵骨器2とする。）安置されていた。右棚には中央にマンガンが1基（蔵骨器6），その左右にボージャーが1基ずつ（左側を蔵骨器4、右側を蔵骨器5とする。）安置されていた。左棚にはボージャーが1基（蔵骨器3）安置されていた。それぞれの蔵骨器からは人骨や副葬品が確認されたが、最も保存状態が良かったのは右棚中央のマンガン（蔵骨器6）で、頭骨等が納められた状態で残っていた。その他の人骨は保存状態が悪く、明瞭に形を伺うことができないものであった。人骨調査の結果、少なくとも計12体の被葬者が埋葬されていることがわかった。

正面棚 左側の石厨子（蔵骨器1）からは副葬品として青銅製の簪が確認された。右側の石厨子（蔵骨器2）からは副葬品として木製の簪、青銅製の煙管が確認された。石厨子の周辺では青銅製の煙管雁首、真鍮製の簪、中国産白磁、近現代磁器の碗が確認された。

右 棚 右側のボージャー（蔵骨器5）からは副葬品として真鍮製の煙管が確認された。左側のボージャー（蔵骨器4）からは副葬品として真鍮製の煙管2つが確認された。中央のマンガン（蔵骨器6）からは副葬品として真鍮製の簪と指輪が確認された。

左 棚 ボージャー（蔵骨器3）からは副葬品として真鍮製の簪が確認された。厨子甕の周辺では沖縄産陶器壺と近現代磁器の碗が確認された。

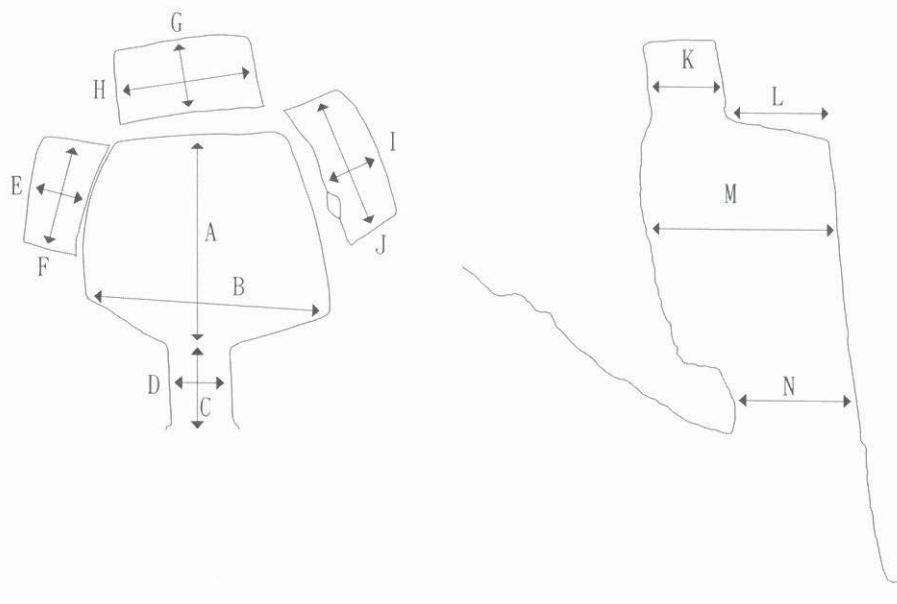
配置順序 本古墓における蔵骨器が安置された順番について見てみる。石厨子は蔵骨器の中では古い

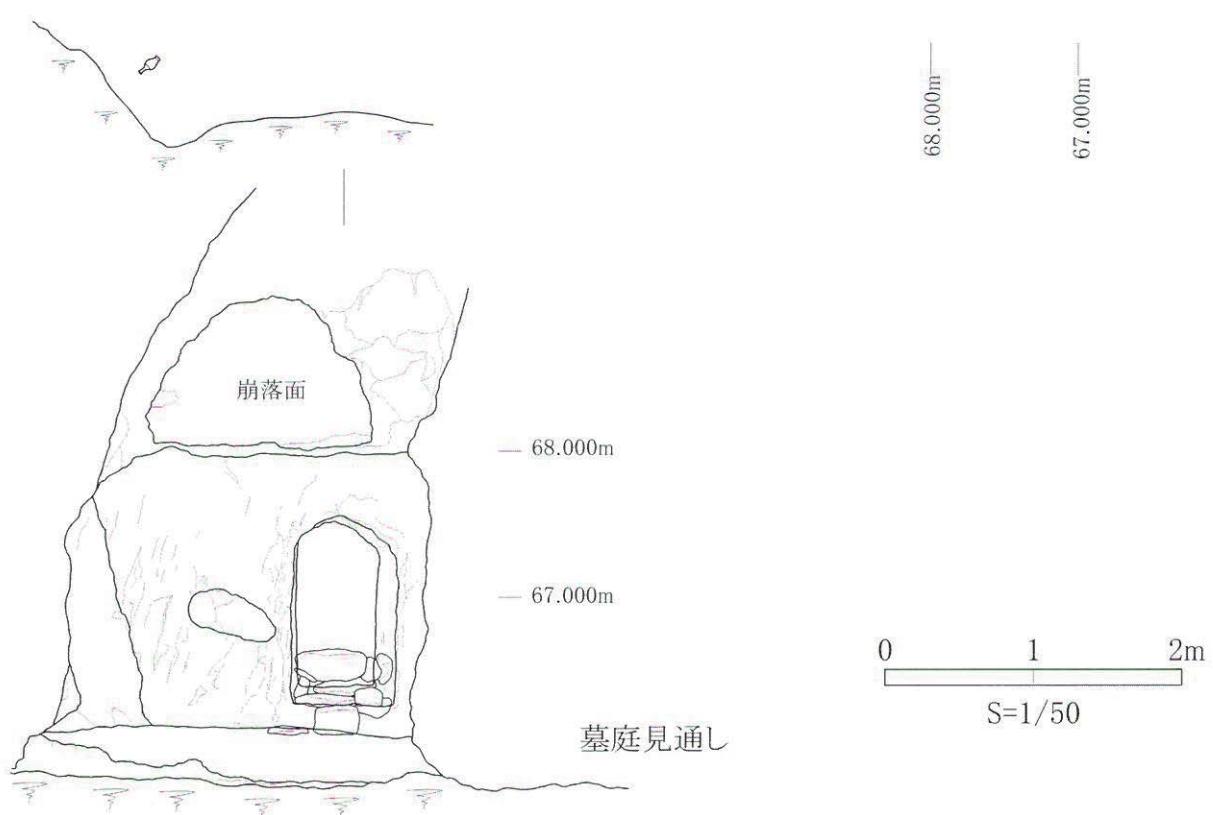
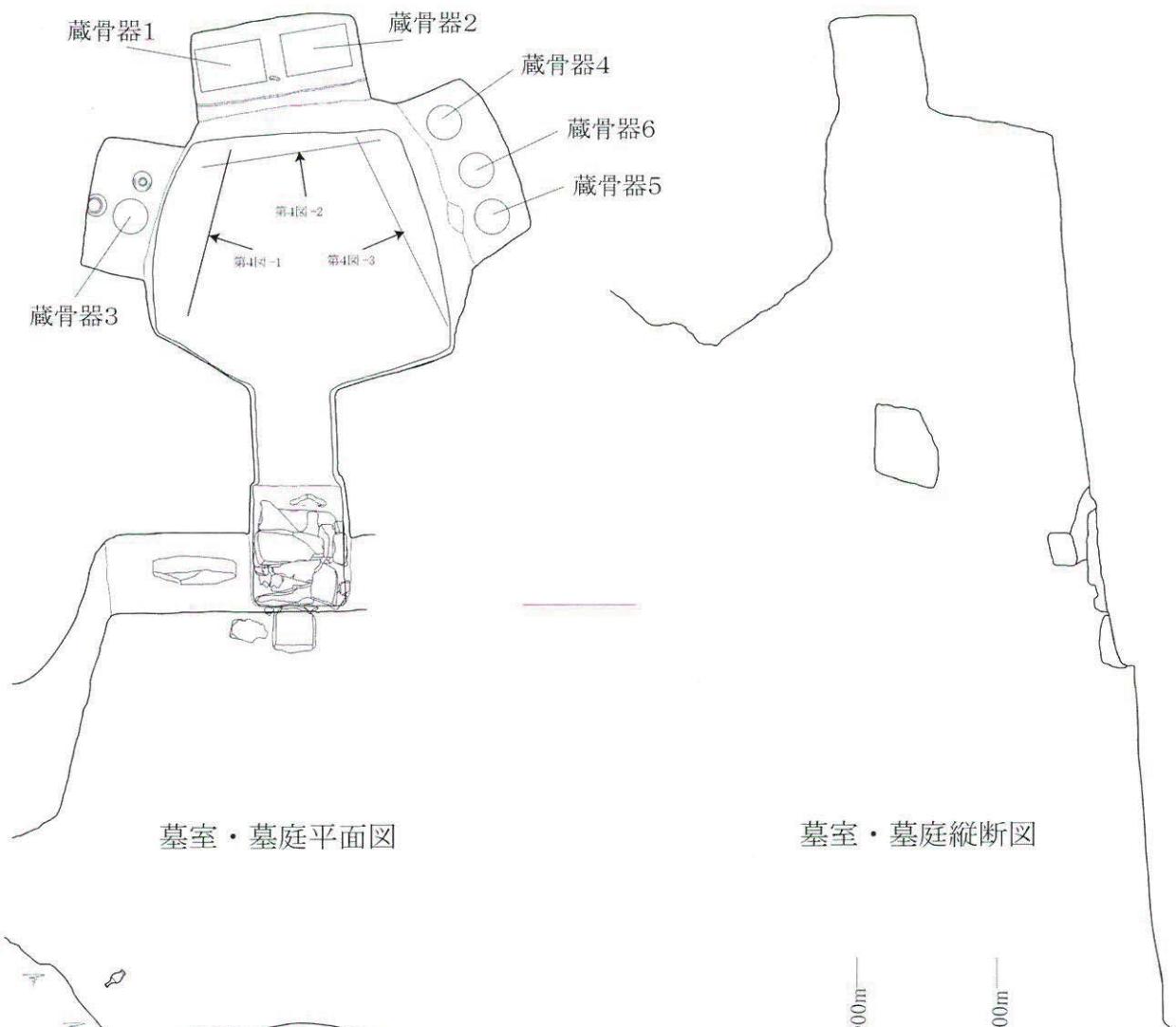
形態とされていることから、正面棚から安置していると考えられる。左右どちらの石厨子が先に安置されたのかは判断できない。次に厨子甕に書かれた銘でもっとも古い年代を示しているのは右棚右にあるボージャー（蔵骨器5, 1770年）で、その後は右棚中央のマンガン（蔵骨器6, 1780年）、棚を変えて左棚のボージャー（蔵骨器3, 1787年）と続き、最後は再び棚を変えて右棚左のボージャー（蔵骨器4, 1797）となっている。このことから、正面棚→右棚（右→中央）→左棚→右棚（左）の順番で使用・配置されており、洗骨順序による左右棚の使い分けはない。

第1表 古墓計測値一覧

計測場所		記号	計測値 (m)
シルヒラシ	奥行	A	1.80
	幅	B	2.08
	高さ	M	1.67
入口	奥行	C	0.70
	幅	D	0.53
	高さ	N	1.04
左棚	奥行	E	0.49
	幅	F	0.96
中央棚	奥行	G	0.63
	幅	H	1.20
	高さ	K	0.63
右棚	奥行	I	0.51
	幅	J	1.21
棚までの高さ		L	0.90

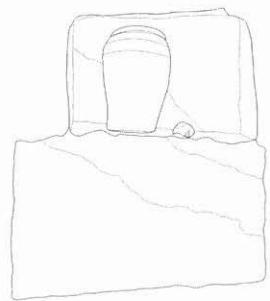
【凡例】





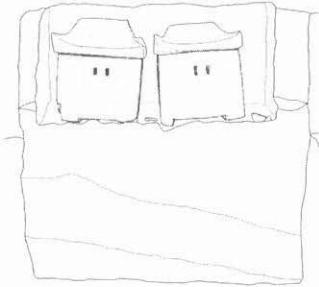
第3図 墓室・墓庭平面・縦断及び墓庭見通

68.000m —



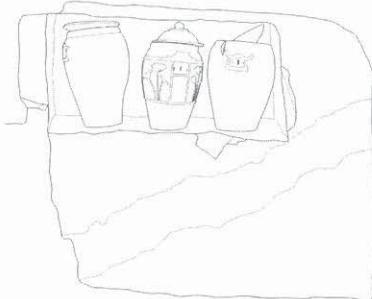
4-1 墓室左棚正面及び断面

68.000m —



4-2 墓室正面棚正面及び断面

68.000m —



4-3 墓室右棚正面及び断面

0 1 2m
S=1/40

第4図 墓室棚及び断面

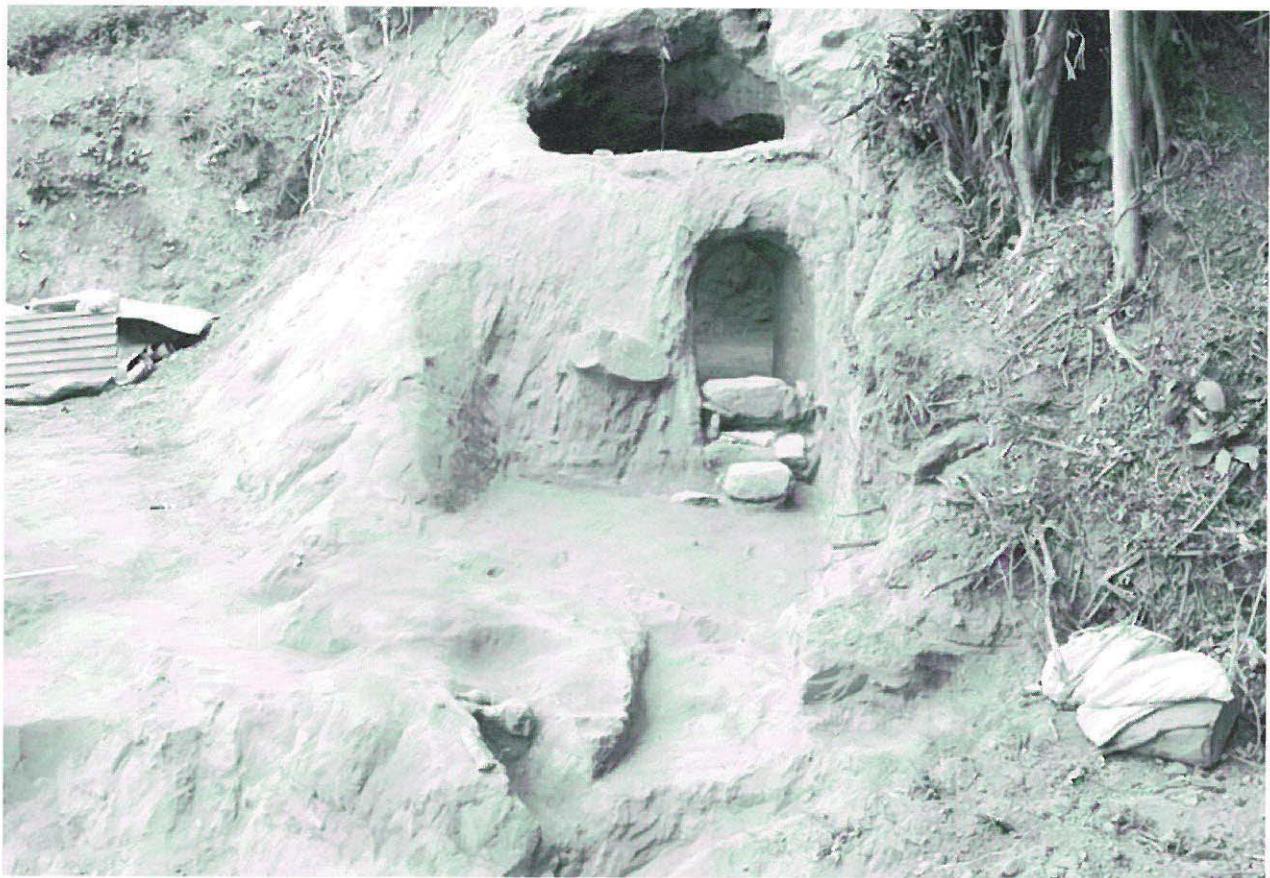


写真05. 古墓検出（正面）

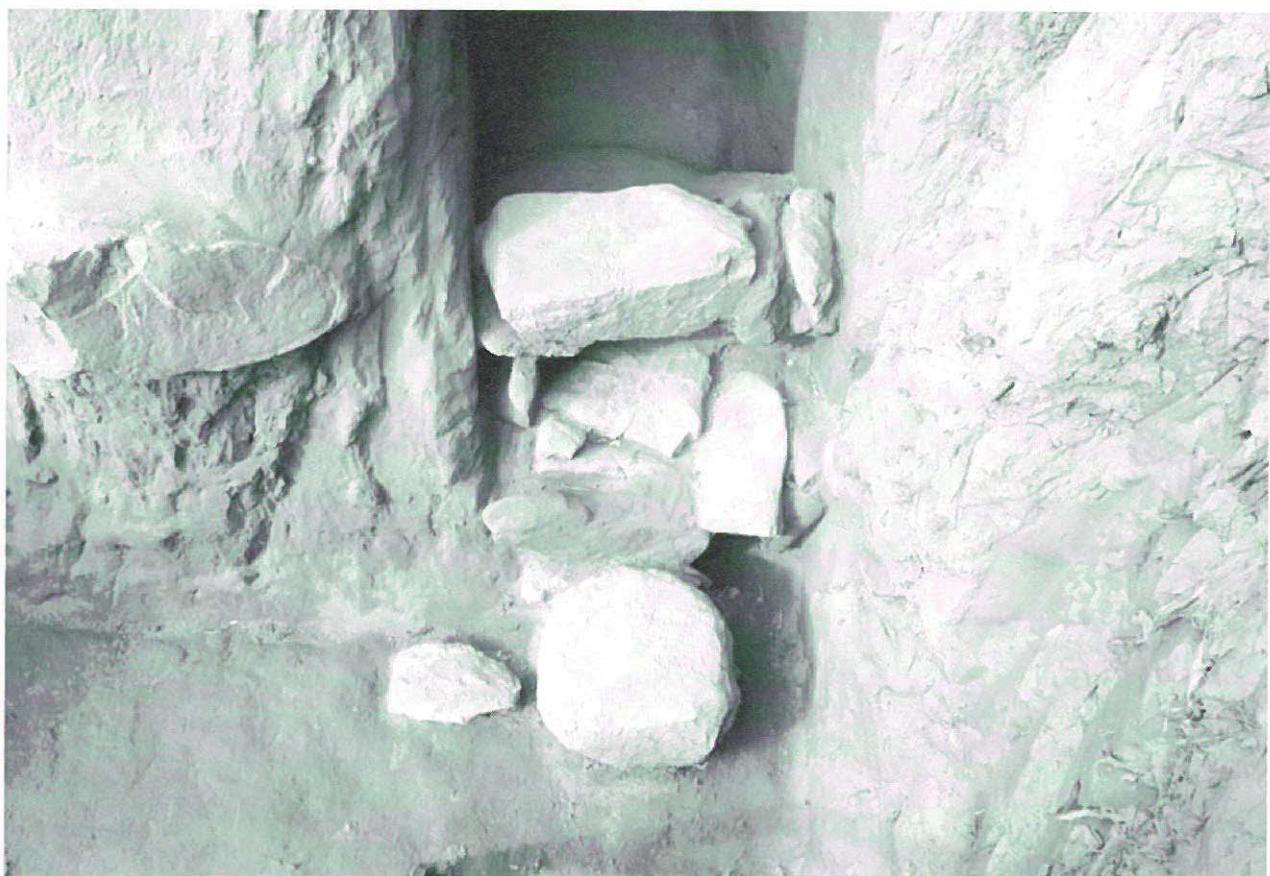


写真06. 入口検出



写真07. 入口（墓室から）



写真08. 入口裏込のクチャ除去後

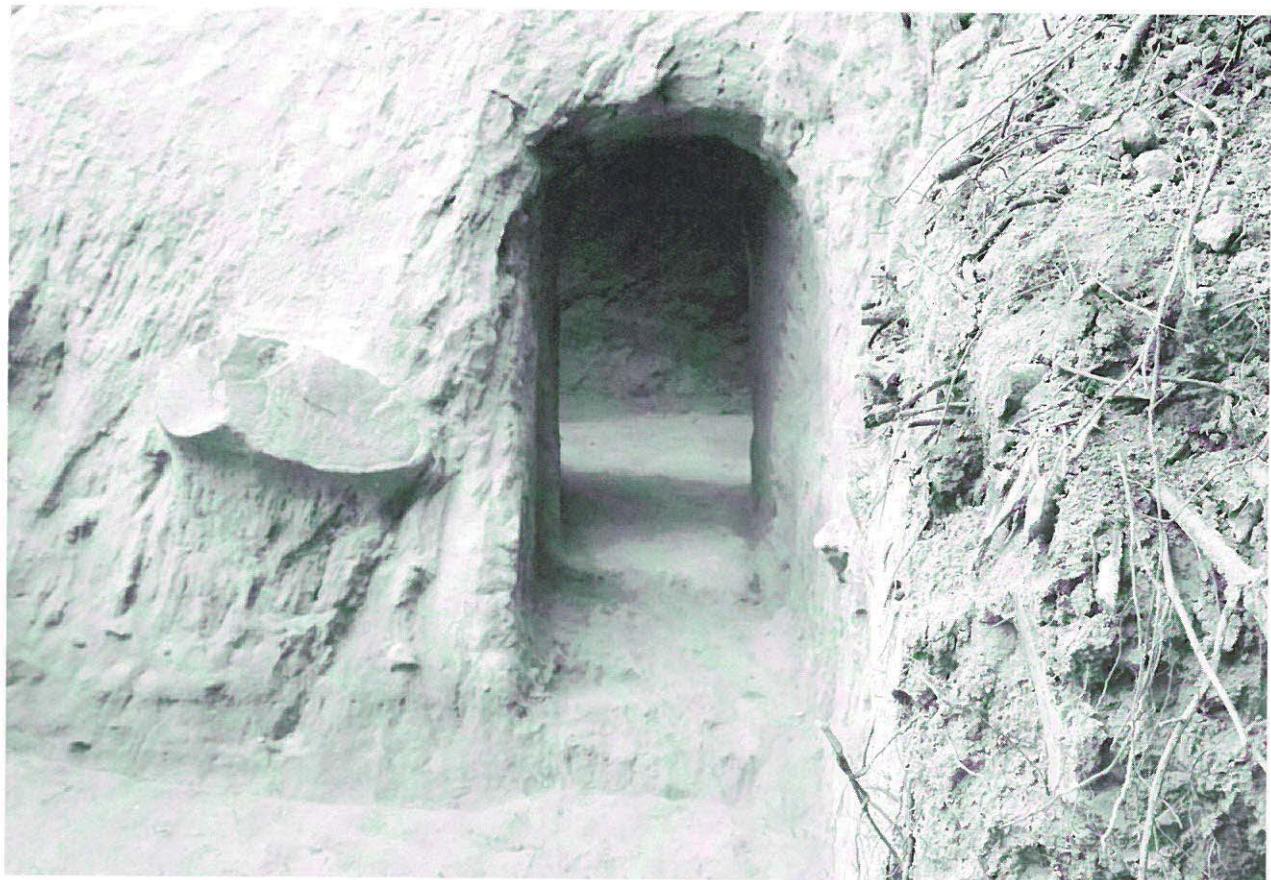


写真09. 入口完掘



写真10. 墓室検出

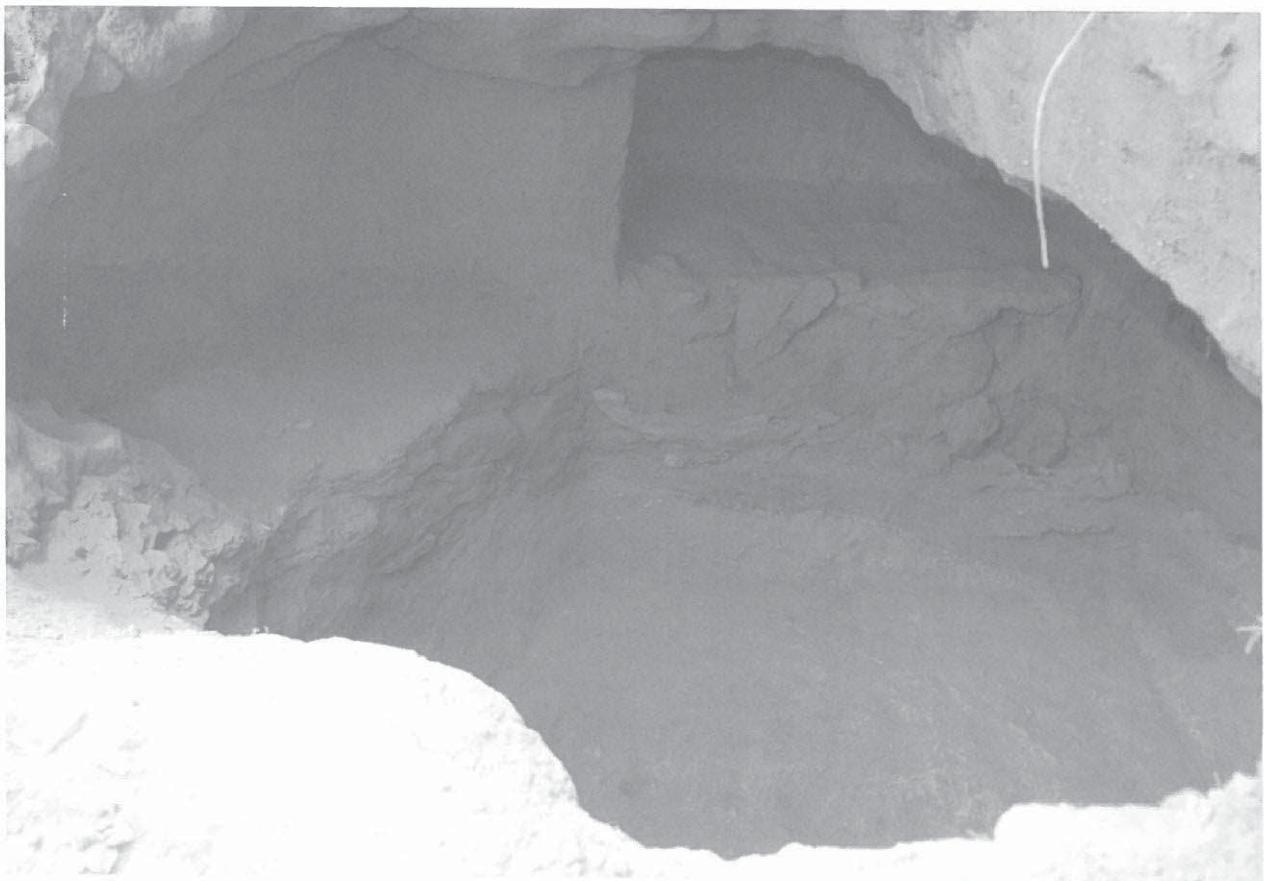


写真11. 墓室完掘（右・正面棚）

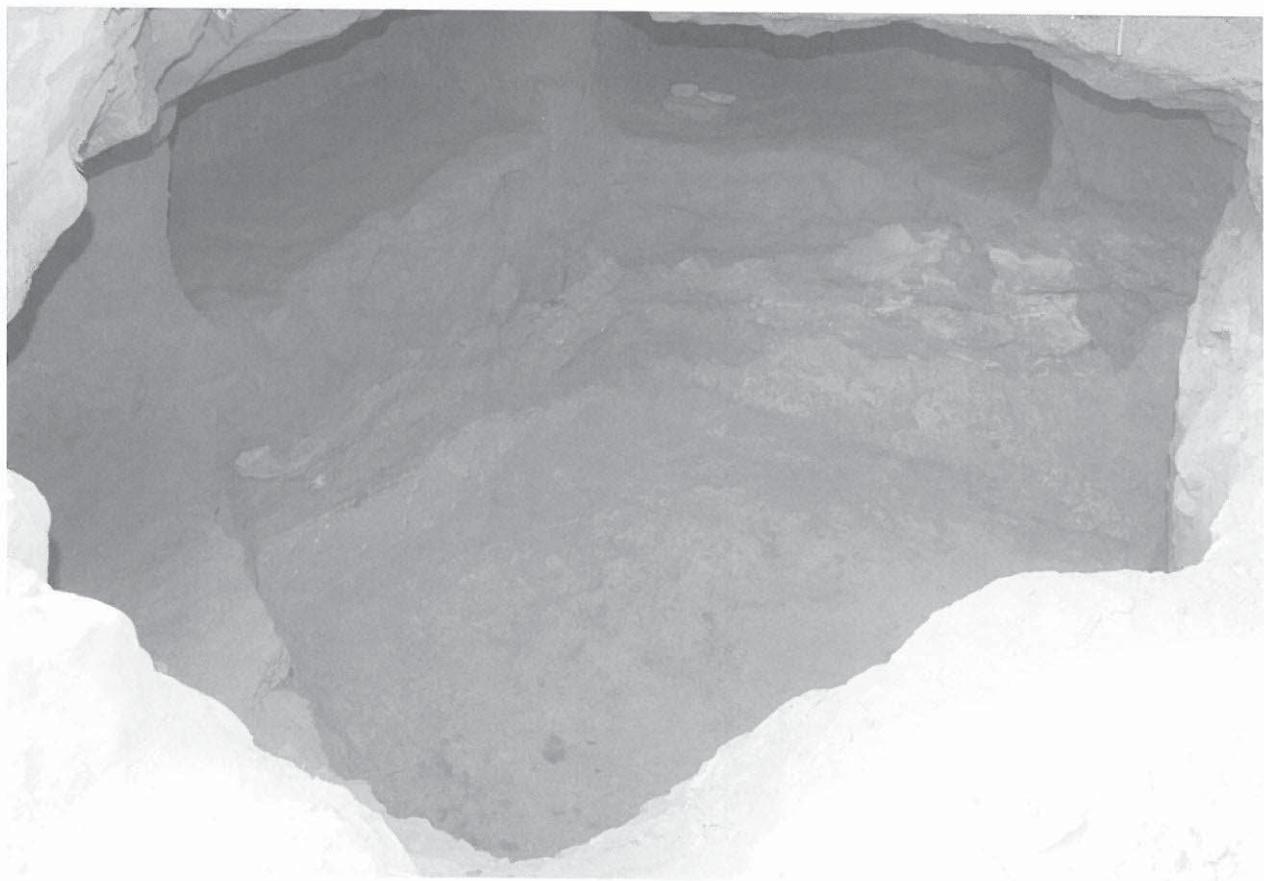


写真12. 墓室完掘（正面・右棚）

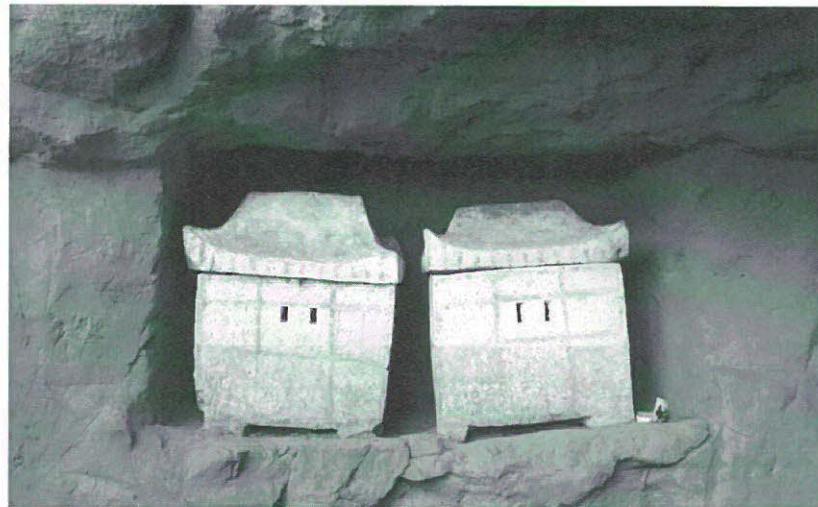


写真13. 正面棚



写真14. 左棚

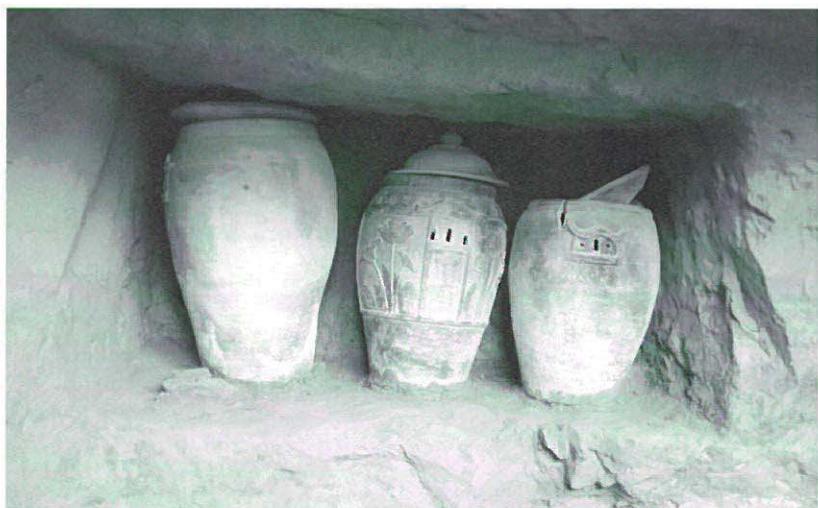


写真15. 右棚



写真16. 正面棚完掘



写真17. 右棚完掘



写真18. 左棚完掘



写真19. 小杯（正面棚）

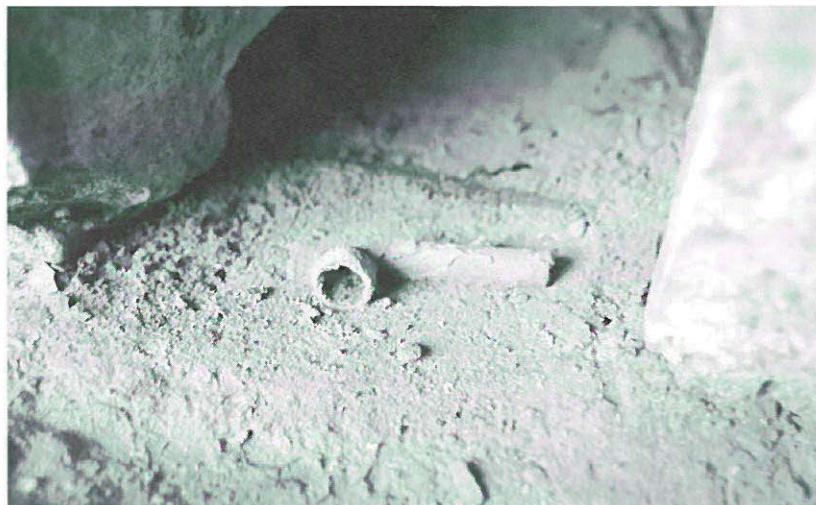


写真20. 煙管（正面棚）



写真21. 瓶（前庭部）



写真22. 人骨調査①



写真23. 人骨調査②



写真24. 簪（蔵骨器 1 内）

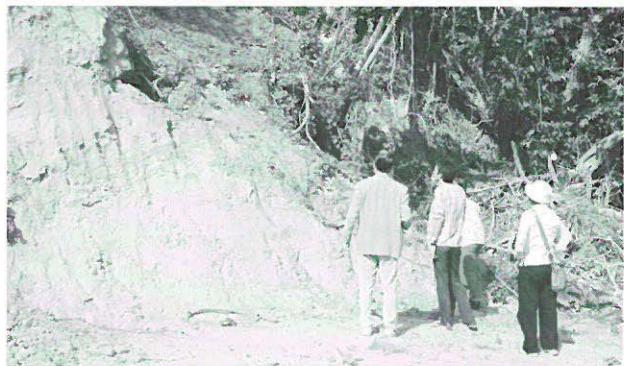


写真25. 事前調整



写真26. 古墓周辺



写真27. 伐採



写真28. バックホウで掘削



写真29. 墓室掘削①



写真30. 墓室掘削②

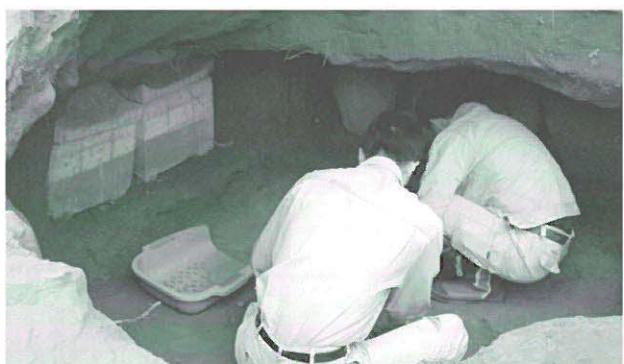


写真31. 墓室掘削③



写真32. 墓室にて

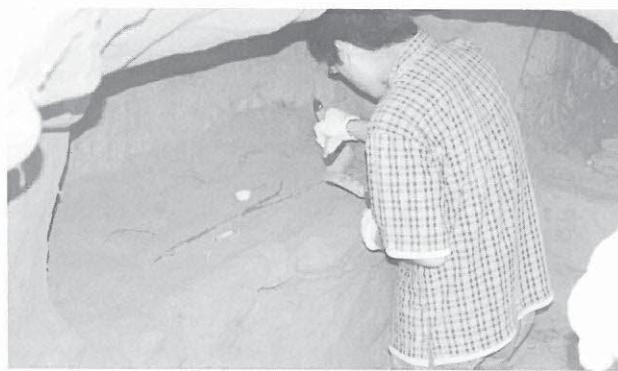


写真33. 墓室正面棚清掃

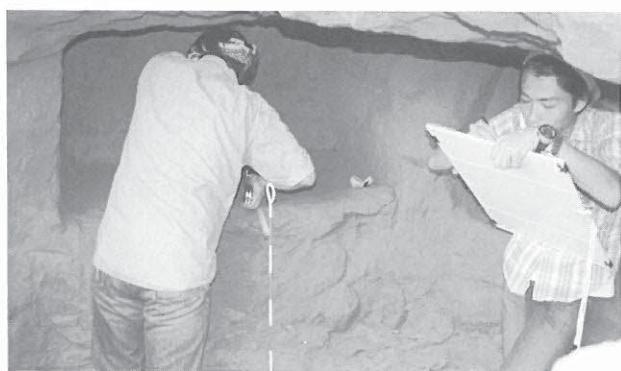


写真34. 墓室実測



写真35. 入口確認



写真36. 入口掘削

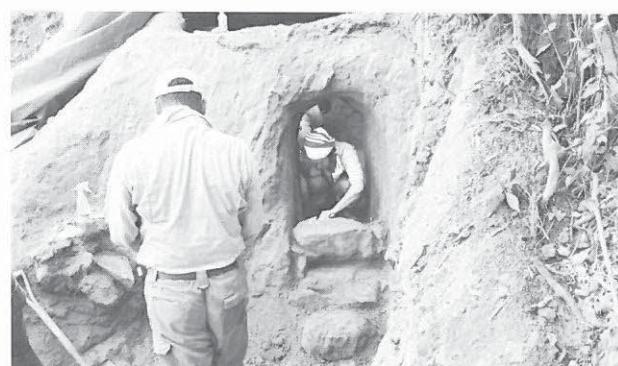


写真37. 入口調査



写真38. 入口実測



写真39. 前庭部確認掘削



写真40. 墓域確認掘削

5. 遺物

遺物は、墓室から蔵骨器（石厨子2基、ボージャー3基、マンガン1基）、煙管、簪、指輪、中国産磁器、沖縄産陶器、近現代磁器が、前庭部より沖縄産陶器が確認された。以下、それぞれの特徴について記述する。

1) 蔵骨器（第5図1、第6図3、第7図11、第8図15・18、第9図21）

蔵骨器は6基確認された。種類と数量は石厨子2基、ボージャー3基、マンガン1基である。蔵骨器の計測値については観察表に記述する（第2表）。

A.石厨子

石厨子は正面棚で2基（蔵骨器1・2）確認された。2基とも形態や法量・文様構成等が良く似ている。文様は朱色で区画が施され、黒色で草花文が施される。蔵骨器1の蓋の頂部中央には逆ハート状の文様が描かれている。

B.ボージャー

ボージャーは3基（蔵骨器3～5）確認された。胴部が緩やかに張り、肥厚する口縁部が内傾し、口唇部が丸みを帯びる。最も古いものは1770年の銘書（蔵骨器5）があり、1787年（蔵骨器3）、1797年（蔵骨器4）と続く。蔵骨器5は比較的小型である。蓋は蔵骨器4・5で確認され、宝珠が付かないタイプである。

C.マンガン

マンガンは1基（蔵骨器6）確認された。肩が張り垂直に立ち上がる頸部（口縁部）を持つ。口唇部は平坦に整える。屋門は玉飾りのない瓦屋形で柱貫が付く。胴部中央を区画する横帯は突帯によって表現され、構成が左右対称形の蓮花文が2対張り付けられている。このことから、安里進氏による編年のⅡ期（安里1997）に属する形態である。

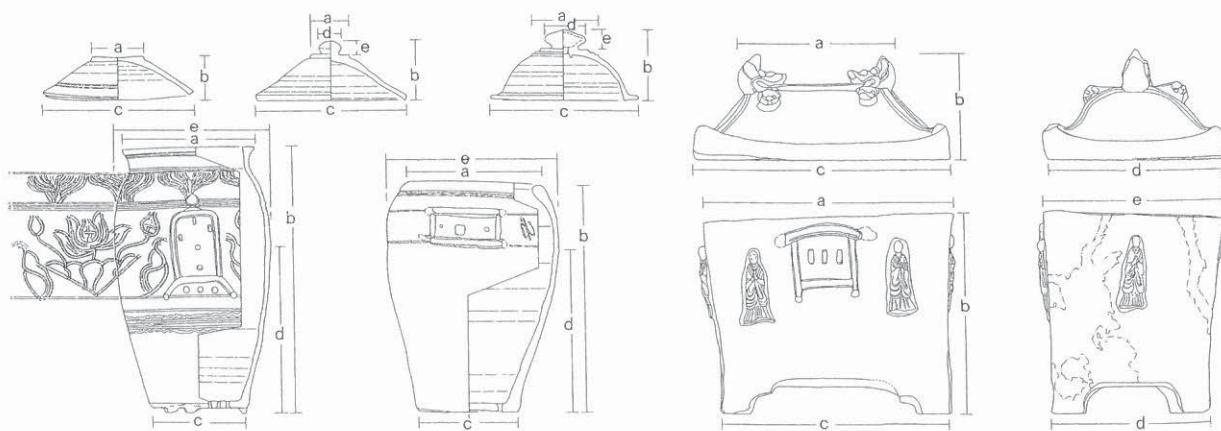
第2表 蔵骨器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	種別	蔵骨器 番号	部位	計測値					人骨	副葬品	銘書年	書代	出土地
					a	b	c	d	e					
第5図 写真41	1	石厨子	1	蓋	27.7	20.5	49.5	37.2	—	成人男性1 成人女性1 幼児1 乳児1	匙簪1	—	正面棚	
				身	45.7	38.2	43.7	31.2	31.2					
第6図 写真42	3	石厨子	2	蓋	28.0	17.5	50.0	35.5	—	成人男性1 成人女性1	木匙簪1 煙管1	—	正面棚	
				身	45.2	40.5	46.5	30.8	30.5					
第7図 写真43	11	ボージャー	3	身	30.4	54.5	26.3	40.0	38.5	不明成人1	花簪1	1787年	左棚	
第8図 写真44	15	ボージャー	4	蓋	10.2	11.1	33.0	—	—	成人男性1 成人女性1	煙管2	1797年	右棚左	
				身	32.1	60.1	26.0	40.0	41.4					
第9図 写真45	18	ボージャー	5	蓋	10.4	8.7	30.7	—	—	成人男性1 乳児1	煙管1	1770年	右棚中	
				身	33.5	46.7	22.5	30.0	35.5					
第9図 写真45	21	マンガン	6	蓋	11.2	15.0	30.2	5.5	5.0	成人女性1	匙簪1 指輪1	1780年	右棚左	
身														

※ 計測部位は『ヤッチノガマ カンジン原古墓群』P.82（沖縄県立埋蔵文化財センター2001）にしたがう。

【蔵骨器計測部位 凡例】



※『ヤッチノガマ カンジン原古墓群』P.82 (沖縄県立埋蔵文化財センター2001) より抜粋

2) 煙管 (第6図5・6, 第7図7, 第8図16・17・19・20)

蔵骨器内より煙管の雁首5点, 吸口4点が得られた。材質は陶器製の雁首1点以外すべて金属製(青銅付着)で, 厨子甕内より雁首と吸口が対になって合計8点出土している。正面棚周辺より雁首が1点得られた。以下, 検出地ごとに記述する(第3表)。

第3表 煙管観察一覧

単位: cm/g

挿図番号 図版番号	番号	部位	火皿の径		長さ	重量	吸口側の径		ラウ接合部の径		材	備考	出土地
			外径	内径			外径	内径	外径	内径			
第6図 写真42	5	雁首	1.2	1.1	4.1	11.5			1.25	1.15	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。	蔵骨器2 石厨子
	6	吸口			3.5	4.6	0.45	0.25	1.05	0.95	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。	
第7図 写真43	7	雁首	1.5	1.25	6.2	13.3			9.5	8.5	金属製	青銅付着、雁首内にラウが一部残存している。	正面棚周辺
第8図 写真44	16	雁首	1.3	1.15	4.6	8.7			0.9	0.75	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。全長約13.7cmと思われる。	蔵骨器4 ボージャー
	吸口				5.3	7.1	0.4	0.25	1.0	0.8	金属製		
	17	雁首	1.2	1.1	3.8	12.7			1.35	1.15	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。全長約16.1cmと思われる。	蔵骨器5 ボージャー
	吸口				6.7	14.8	0.4	0.35	1.4	1.2	金属製		
	19	雁首	1.6	1.1	3.0	5.5			1.4	0.9	陶器製	陶器製で対になる吸口は金属製の第8図20と思われる。	
	20	吸口			5.75	1.7	0.45	0.2	1.0	0.95	金属製	青銅付着、吸口内にラウが一部残存している。	

3) 簪 (第5図2, 第6図4, 第7図9・12, 第9図22)

簪は完形品が5点得られた。『琉球風俗絵図』(鈴木治雄1982)によると簪は花形, 匙状, 耳搔き形に分けられ, 材質も階級によって違う様である。当遺跡から得られた簪は男性用の花形簪と, 女性用の匙状簪である。素材は4点が銅製で, 1点のみ木製である。木簪の出土は珍しく, 当遺跡以外からは那覇市の『ナーチューモ古墓遺跡』から類似資料が1点出土している(玉城2000)。詳細は観察表に記述する(第4表)。

第4表 簪観察一覧

単位: cm/g

挿図番号 図版番号	番号	分類	材質	残存長	各部位のサイズ				重量	観察事項	出土地
					花(カブ) (最大計・厚さ)	首	ムディー	竿			
第5図 写真41	2	匙状	銅	15.6	0.9	—	3.8	10.9	9.76	カブは匙状。首は六角形、竿は六角錐を呈する。細身の作り。簪全体に鍍金が施されていた様で、ところどころ剥がれる。女性用本簪。	蔵骨器1 石厨子
第6図 写真42	4	匙状	木	10.3	0.9	—	—	9.4	1.30	カブは匙状をなすが、浅い。側面から見ると、層を成すように剥がれており、脆い。女性用本簪。	蔵骨器2 石厨子
第7図 写真43	9	花形	銅	8.05	1.82 0.68	1.1	0.8	5.47	9.76	花形。首は六角形、ムディーは丸、竿は四角柱を呈する。首から竿にかけて鍍金が施されてた様だがほとんど剥がれている。男性用本簪。	正面棚 周辺
	12			10.22	2.12 0.4	0.95	1.22	7.65	9.80	花形。首は六角形、ムディーは丸、竿は四角柱を呈する。ムディーは捩れる。全体的に鍍金が施されてた様だがほとんど剥がれている。男性用本簪。	蔵骨器3 ボージャー
第9図 写真45	22	匙状		15.9	1.7	—	4.4	9.8	23.39	カブは匙状。首は六角形、竿は六角錐を呈する。女性用本簪。	蔵骨器6 マンガン

4) 指輪 (第9図23)

指輪は、金属製で蔵骨器6内から1点得られた。指輪の直径が1.8cm, 幅0.4cm, 厚さ0.04cm, 重量1.0gである。側面に連続する菱形の区画内に三つの巴文がみられ、区画外には縦位に刻目が施されている。

5) その他 (第7図8・10・13・14, 第9図24)

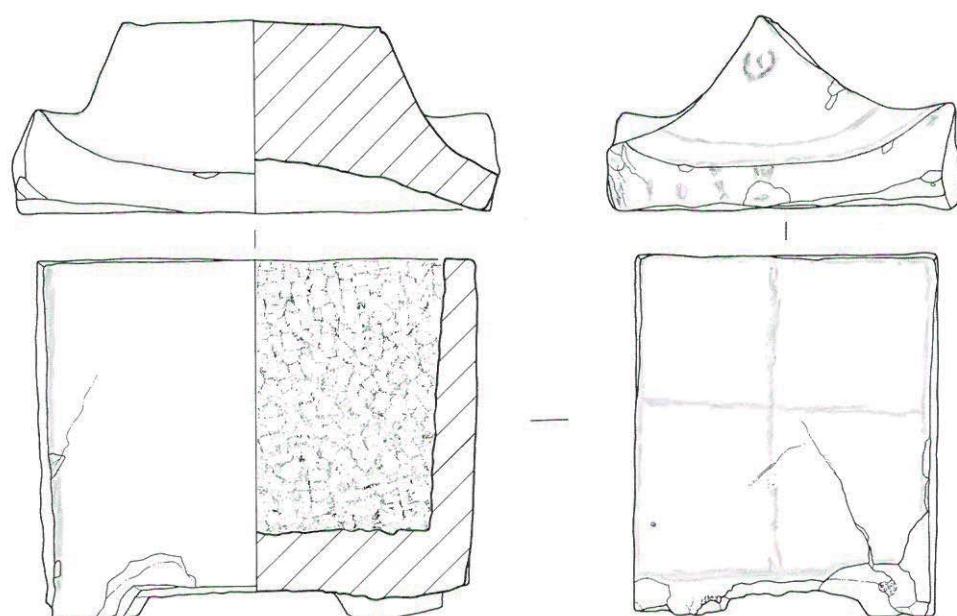
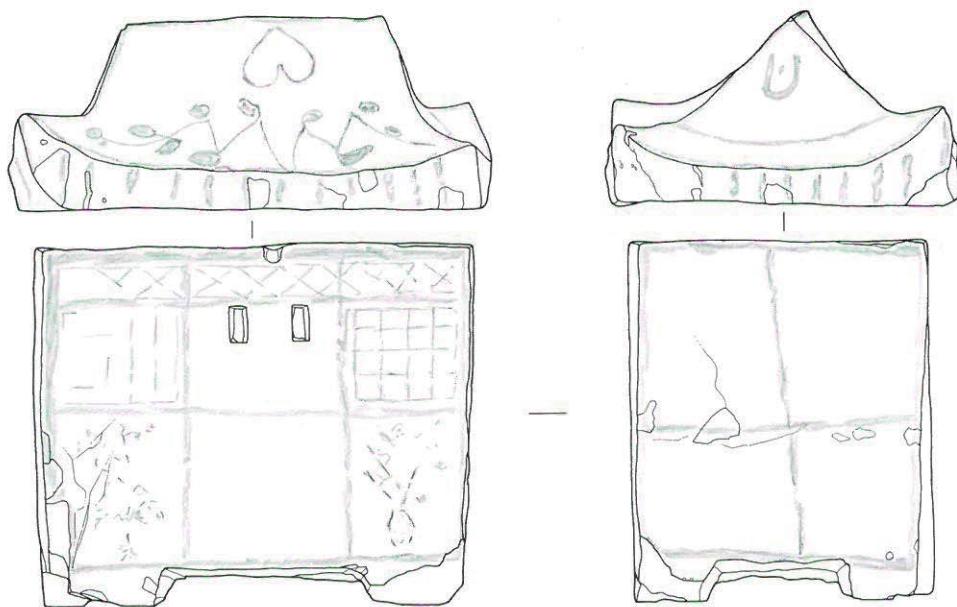
その他の遺物として、墓室より中国産白磁の小杯が1点(第7図8), 沖縄産陶器壺が1点(第7図13), 本土産近現代磁器の碗が2点(第7図10・14), 前庭部より沖縄産陶器の瓶子が1点(第9

図24) 確認された、中国産白磁の小杯や沖縄産陶器壺・瓶については、本古墓が機能しているときに使用されたものと考えられるが、本土産近現代磁器については年代が新しいため、古墓が転用して使用された結果残されたものと考えられる。詳細は観察表に記述する(第5表)。

第5表 その他の遺物観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	番号	種別	器種	残存	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第7図 写真43	8	中国産磁器 (白磁)	小杯	完形	4.2 2.3 1.9	白磁。型作り。腰部から口縁部にかけてシャープに立ち上がり、口縁部が直行する。口唇部は口剥げとする。釉はやや淡青色を帯びる。	正面棚
	10	近現代磁器	碗	半分	10.8 6.0 3.8	本土産。外面は口縁部直下に1条、高台脇に1条の圈線。体部は全体的にイチョウの葉と銀杏が描かれる。内面は口縁部直下に雷文、見込みに秋を表現する文様。	正面棚
	13	沖縄産陶器	壺	一部 欠損	11.6 5.7 4.4	無釉の荒焼壺。胴部に丸みを持たせ、肩は張らないナデ肩、頸部が垂直に立ち上がり、口縁部をL字に外反させる。	左棚
	14	近現代磁器	碗	完形	9.9 20.6 7.7	本土産。外面は口縁部直下に1条、高台と腰部の境界に2条の圈線。体部の約半分に大きな葉文が2個描かれる。内面は口縁部直下と見込みに1条の圈線、見込み中央に「寿」字文が描かれる。	左棚
第9図 写真45	24	沖縄産陶器	瓶	完形	3.1 14.2 4.8	全体的に飴色釉がかかる。口唇部が丸みを帯び、口縁部は外反し、長い頸部を有する。胴部最大径は上部になる。高台は外側に強く開き、置付を平坦に整えて、研磨している。	前庭部



藏骨器 1

1

0 20cm

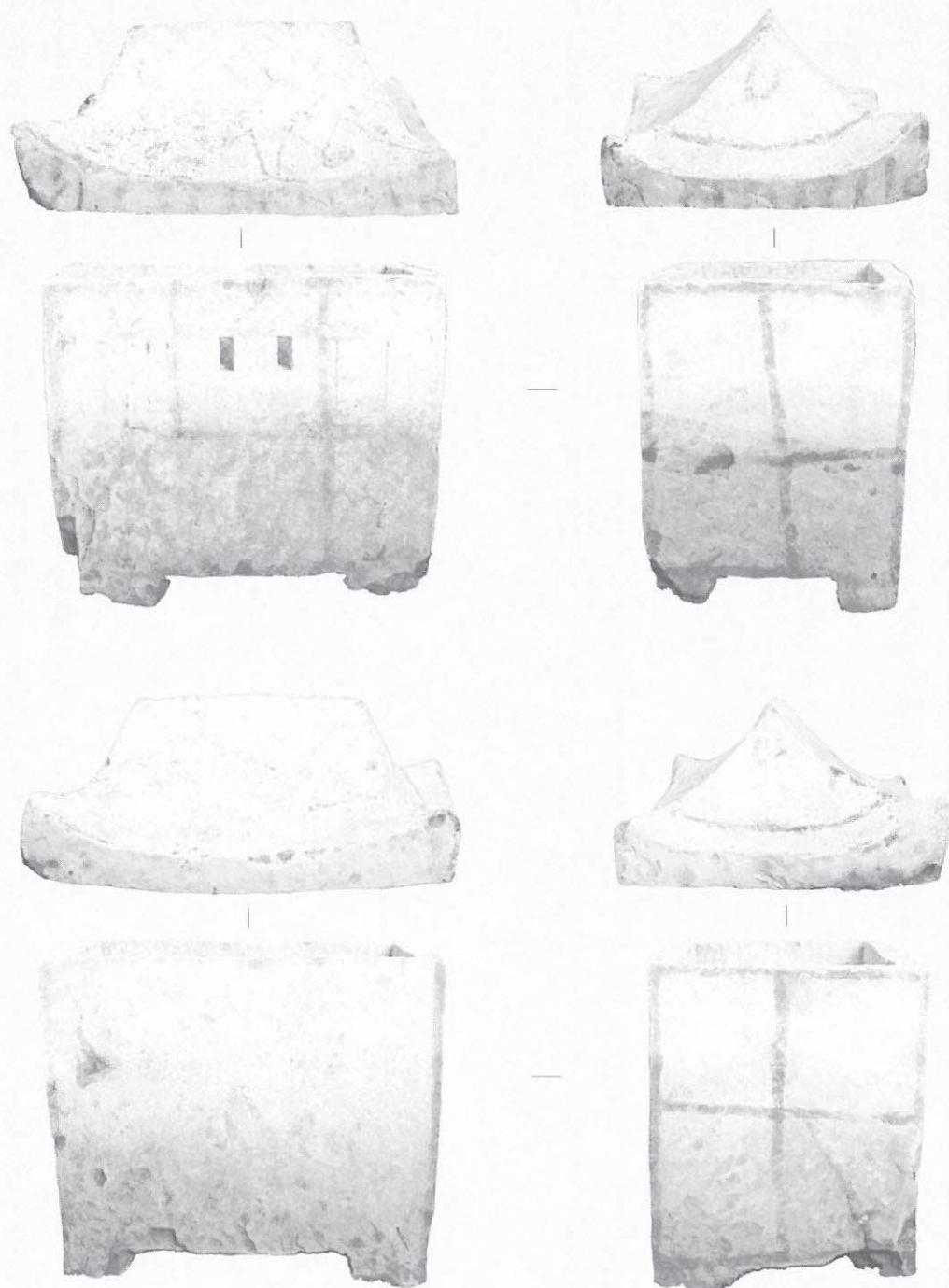


副葬品

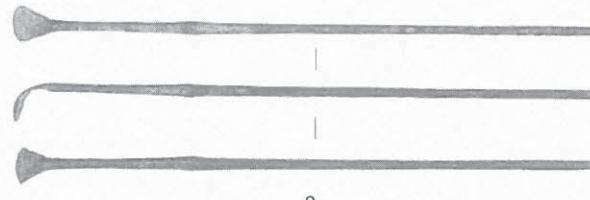
2

0 5cm

第5図 出土遺物1 正面棚

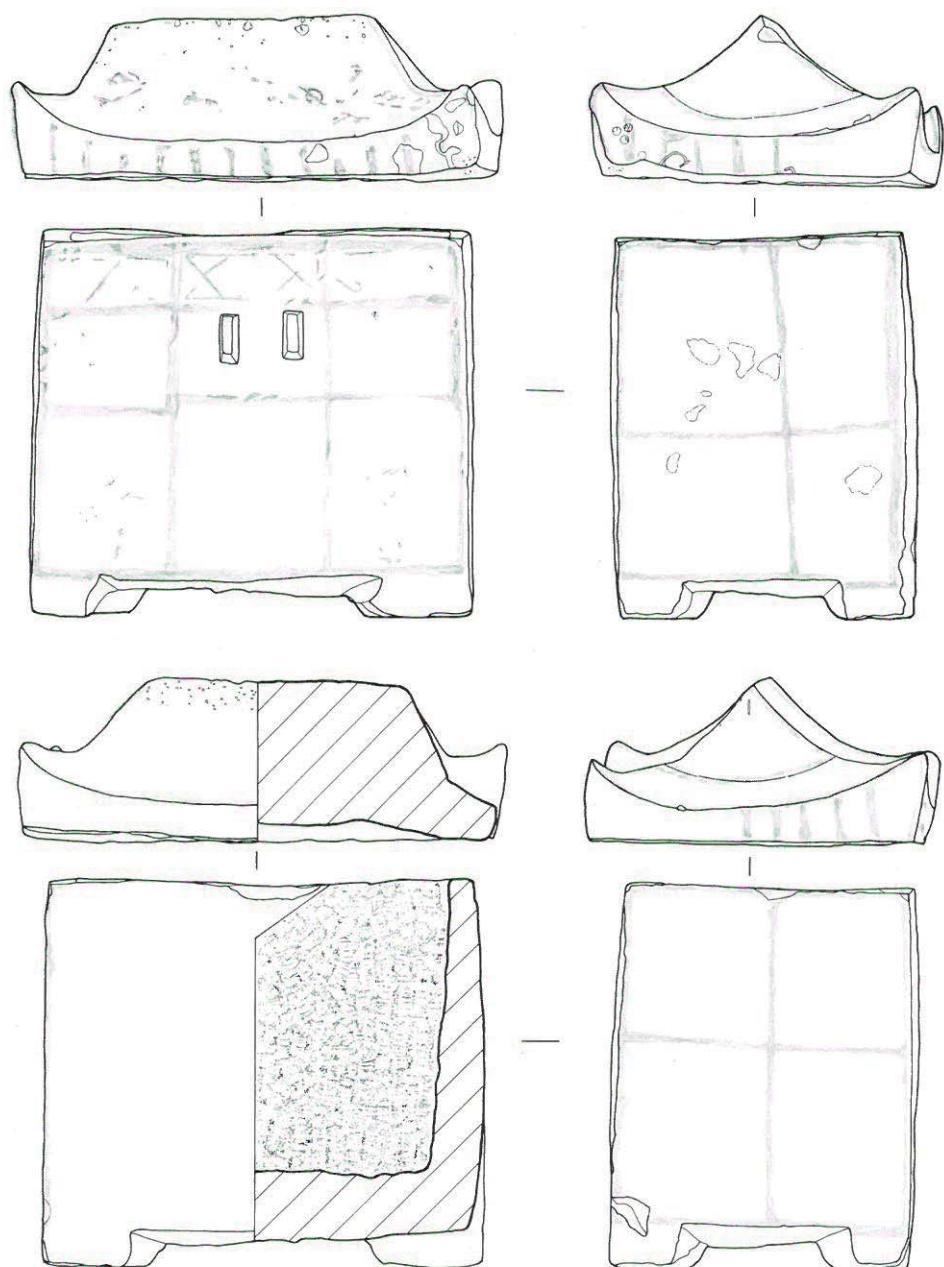


1



2

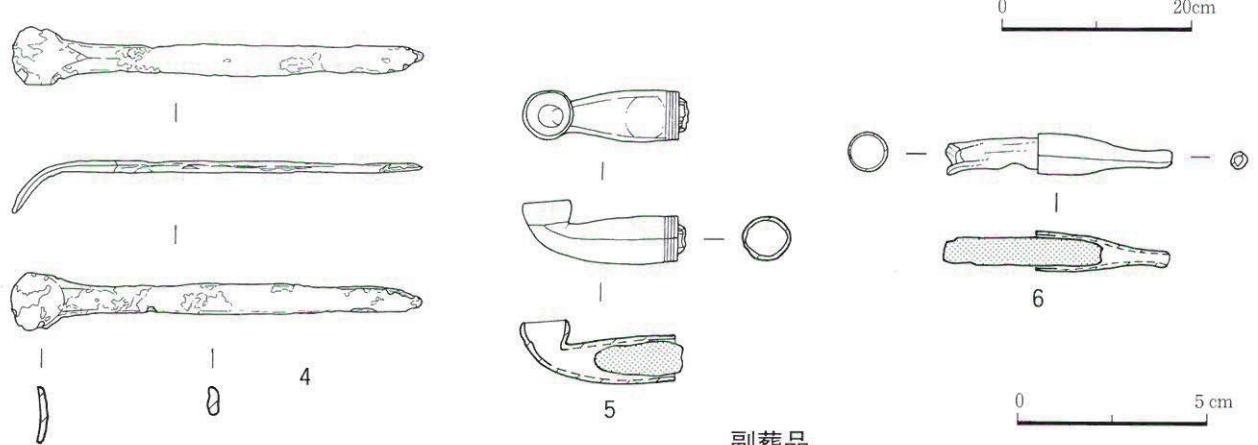
写真41 出土遺物 1 正面棚



藏骨器 2

3

0 20cm



4

5

6

0

5 cm

副葬品

第6図 出土遺物2 正面棚

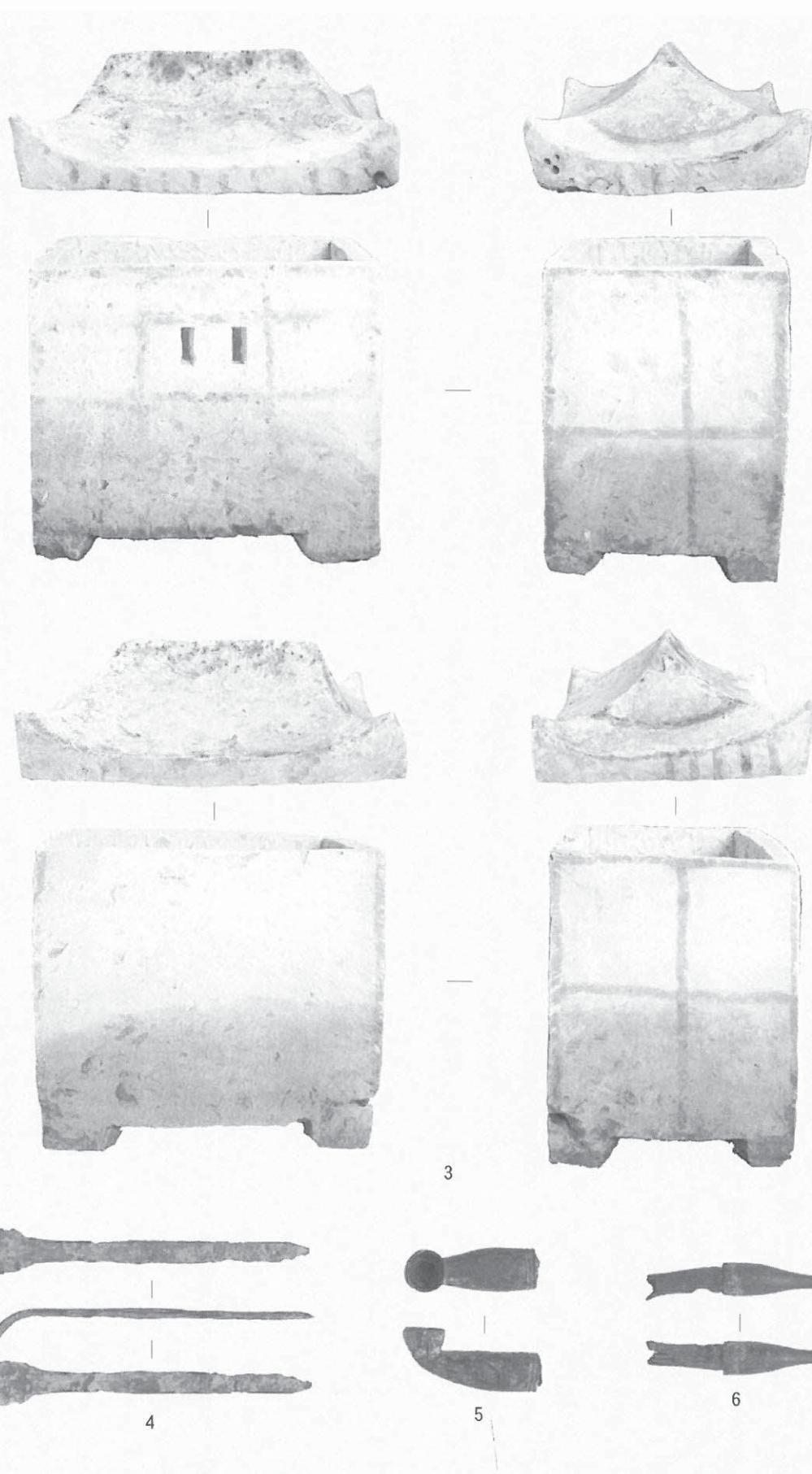
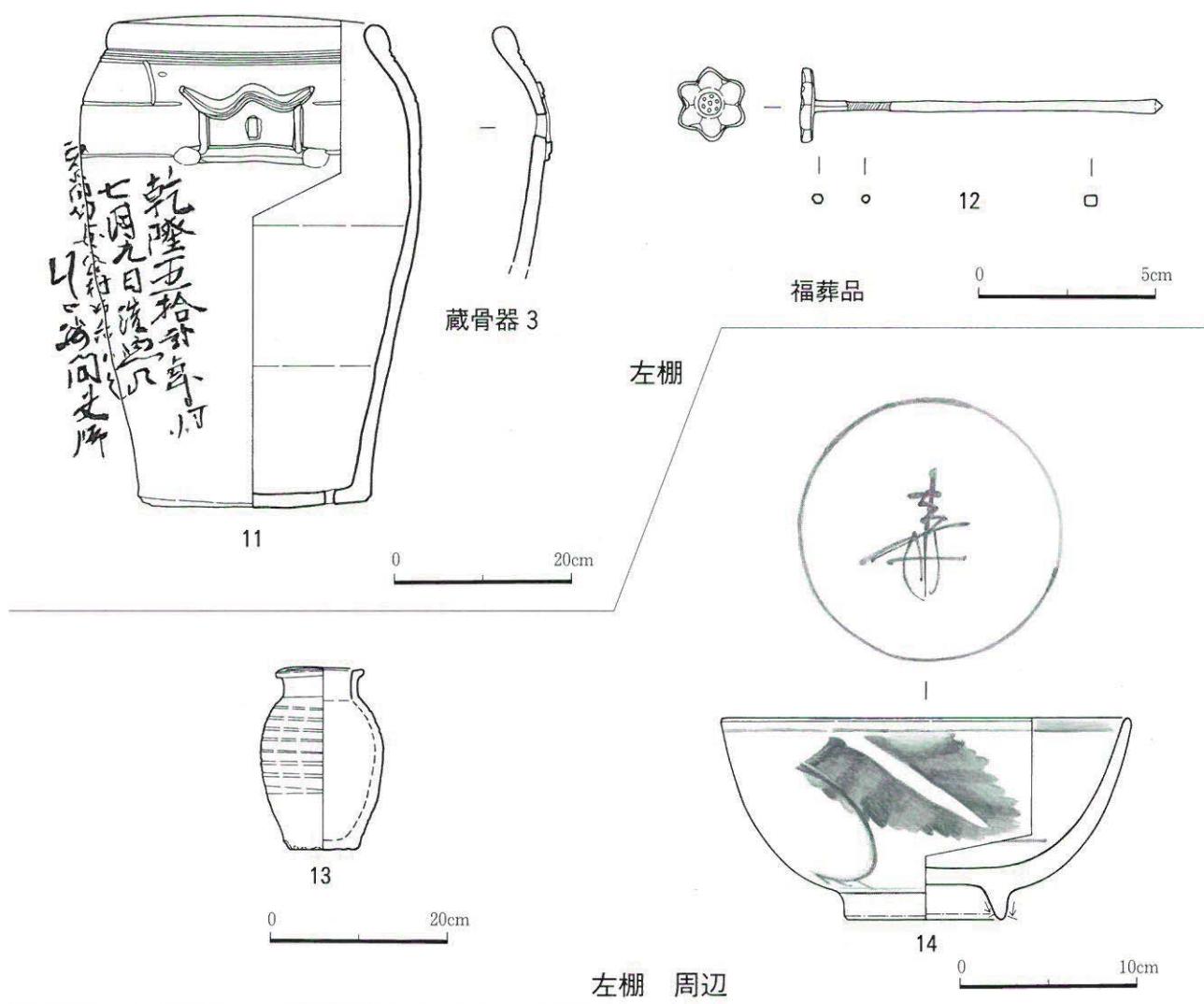
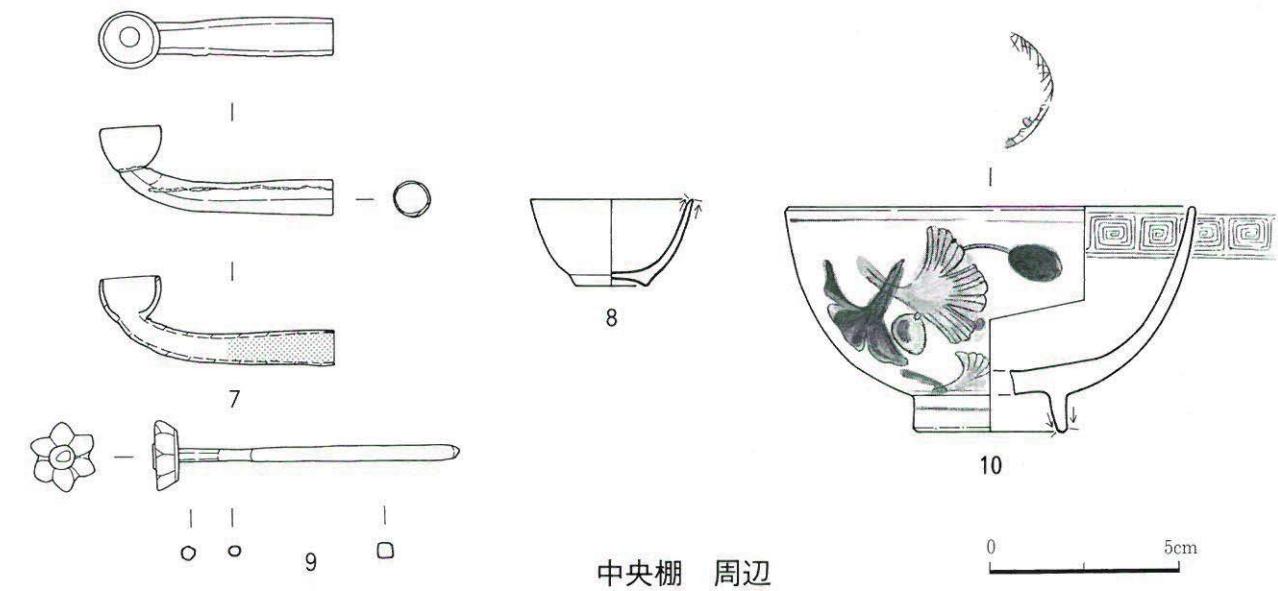
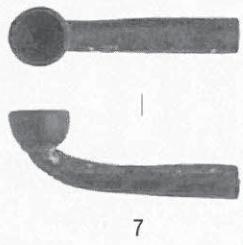


写真42 出土遺物 2 正面棚



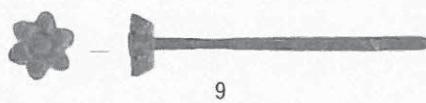
第7図 出土遺物3 正面棚周辺・左棚・左棚周辺



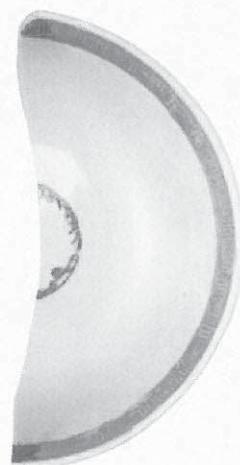
7



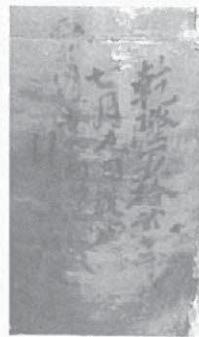
8



9



10



11



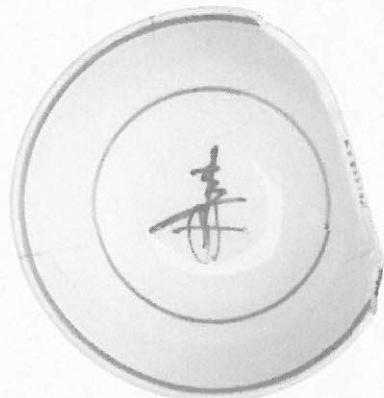
12



10

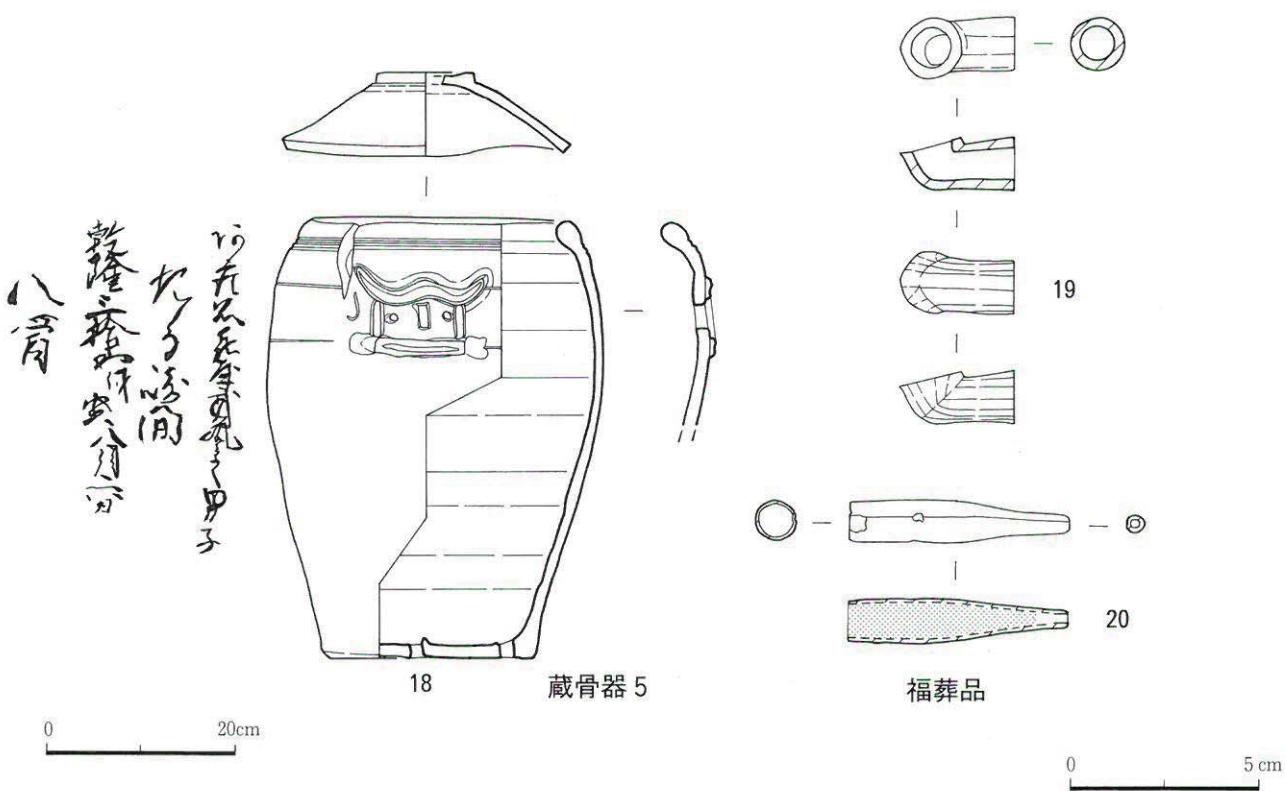
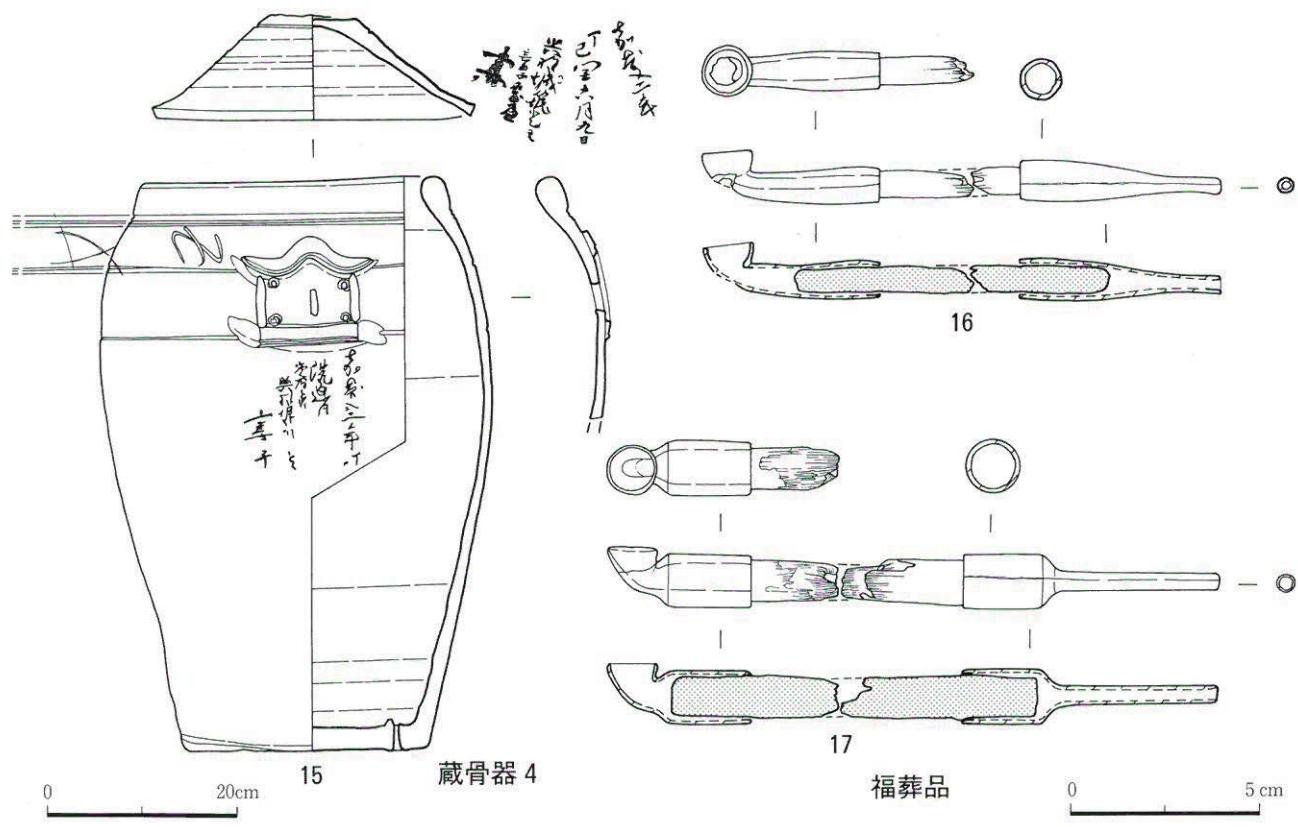


13



14

写真43 出土遺物 3 正面棚周辺・左棚・左棚周辺



第8図 出土遺物4 右棚



15



16



17



18

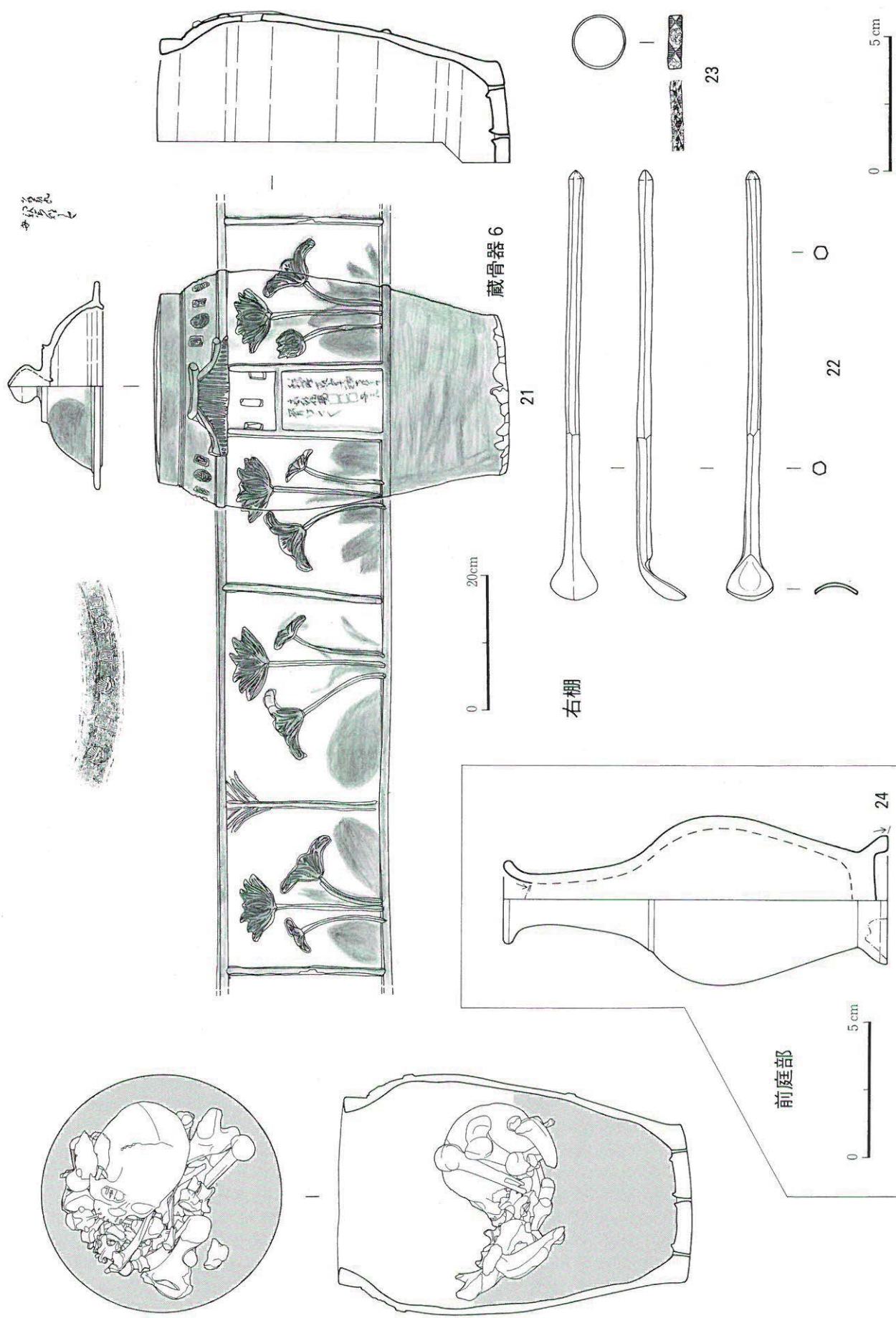


19



20

写真44 出土遺物 4 右棚



第9図 出土遺物5 右棚・前庭部



写真45 出土遺物 5 右棚・前庭部

6. 銘書判読

中部日本鉱業研究所 井伊浩一郎

池田上原古墓から出土した蔵骨器の内、石厨子2基を除くすべての蔵骨器に銘書があった。以下、その内容を記述する。

蔵骨器3

○ボージャー身(1787年洗骨)

乾隆五捨貳年丁未／七月九日洗骨／西原間切安室村□□□(之?)／
□□崎間(ノ?)文(修?)

蔵骨器4

○ボージャー身(1797年洗骨)

嘉慶二年丁巳／洗骨／安室村／與那城(筑登之)／妻子

○ボージャー蓋

嘉慶二年／丁巳閏六月九日／與那城筑登之／童子名たへ／妻

蔵骨器5

○身(1770年洗骨)

あ□ろ(むら?)□筑登之男子／たる崎間／乾隆三捨五(庚)寅八月六日／(洗)骨

蔵骨器6

○マンガン蓋

さき(ま)／親雲(上利し也?)／母

○マンガン身(1780年洗骨)

乾隆四捨五年庚亥(ほんとうは子)十月□(日)／さき(ま)親(雲?)・・母洗／骨□□□

7. 人骨調査

琉球大学医学部 土肥直美

西原町教育委員会による池田上原古墓の発掘調査において出土した人骨について、その概略を報告する。人骨の保存状態が全体的に悪かったため、本調査においては主に蔵骨器内に納められている被葬者の数・性別・年齢などの確認に焦点を絞って調査した。その結果、本墓には少なくとも成人男性4体、成人女性4体、性別不明成人1体、幼児1体、乳児2体、計12体の被葬者が葬られていることが確認された。

蔵骨器1 石厨子出土の人骨 (成人男性1体、成人女性1体、幼児1体、乳児1体) :

保存不良の全身骨片。右上腕骨片2(♂?1, ♀1), 左上腕骨片1(♀), 左右大腿骨片(♀), 大腿骨頭部(♂)が確認できた。また、検出された乳臼歯に、咬耗を受けたものと未萌出のものが認められたことから、本石厨子には成人男女に加えて、幼児と乳児各1体が納められていたと推定される。

蔵骨器2 石厨子出土の人骨 (成人男性1体、成人女性1体) :

比較的保存の良い全身骨片。頭骨片、下顎骨片(老年)、左右寛骨各1(♀), 右寛骨1(♂), 左右上腕骨各1(♂), 右尺骨(♂), 左尺骨(♀), 右橈骨2(♂, ♀), 左右大腿骨2対(♂,

♀），右脛骨1，左脛骨2，左右距骨2対（♂，♀）などが確認できた。また、男性の右大腿骨最大長（約40cm）からピアソンの式によって計算した推定身長は156.5cmとなった。これは近世沖縄人男性の平均身長とほぼ同じである。

蔵骨器3 ボージャー出土の人骨（性別不明成人1体）：

少量の保存不良人骨片と歯牙片。歯の咬耗度（Brocaの2度）から年齢は30代から40代と推定される。

蔵骨器4 ボージャー出土の人骨（成人男性1体，成人女性1体）：

ほぼ全身骨片が含まれていると思われるが、保存状態は良くない。左右2対（成人男女）の大脛骨片が確認された。

蔵骨器5 ボージャー出土の人骨（成人男性1体，乳児1体）：

少量の保存不良人骨片。成人男性と思われる右上腕骨片、左大腿骨片および少量の頭骨片が確認できた。また、乳児のものと推定される左上腕骨、左大腿骨、頭骨片、未萌出の右下顎第1乳臼歯が認められた。

蔵骨器6 マンガン出土の人骨（成人女性1体）：

比較的保存良好な全身骨1体分。寛骨、四肢骨の特徴から性別は女性、歯の咬耗度（Brocaの2度）から年齢は30代から40代と推定される。寛骨には妊娠・出産痕とされる明瞭な前耳状溝が認められるので、本被葬者は経産婦と考えられる。

8. まとめ

池田上原古墓は西原町字池田上原813-1に所在した。個人墓新築のための緊急発掘調査を沖縄県立埋蔵文化財センターが協力し、西原町教育委員会が主体となって実施した。発掘調査は平成16年11月16日～11月26日まで実施し、資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターにて実施した。

古墓は、発掘調査前は土砂によって完全に埋没しており、樹木が鬱蒼と茂っていた。そのため、古墓が存在することが知られてなく、個人墓新築のためバックホウによって丘陵を掘削中に墓室の天井が破壊され、確認できたものである。周辺にも同様の古墓が何基か存在することから、少数ながら古墓群を形成している。

古墓の形態は微粒砂岩（ニービ）を基盤とする丘陵斜面に構築された掘込墓（フィンチャー）である。墓内の平面形態は方形を志向しており、入口には僅かながら石積みが確認された。

墓内は正面と左右に高い棚を設けており、計6基の蔵骨器が安置されていた。安和氏による編年によれば高い棚を設けるタイプは古い形式の古墓となっている（安和・仁王2005）。蔵骨器の種別は石厨子2基、ボージャー3基、マンガン1基で、石厨子以外の蔵骨器にはすべて銘書があった。また、それぞれの蔵骨器には簪や煙管・指輪といったなんらかの副葬品が含まれていた。マンガン1基を除く蔵骨器は人骨の保存状態が悪くほとんどが骨片となっていた。人骨調査の結果、本古墓には少なくとも成人男性4体、成人女性4体、性別不明成人1体、幼児1体、乳児2体、計12体の被葬者が葬られていることが確認された。12名の内、乳児や幼児が1／4（3名）も含まれていることは、当時の社会情勢を反映しているのか心痛むものである。

銘書によって古墓が使用されていた年代を考えてみると、最も古い年代が明記されていたのは、左棚の左側で確認された1770年銘の蔵骨器6（ボージャー）で、最も新しいのは左棚の右側で確認された1797年銘の蔵骨器4（ボージャー）である。正面棚で確認された石厨子はそれより古いものと考えられるため、古墓の使用年代の中心は18世紀の範疇に収まるものと考えられる。年代順による左右の

棚の使い分けは見いだせない。

出土遺物の内、簪や煙管といった副葬品がすべて蔵骨器内から確認されたわけではなく、簪1点と煙管1点については正面棚の石厨子周辺から確認された。また、本土産の近現代磁器も確認されていてことから、本古墓は墓として使用されなくなつてから転用され、別の機能として使用された可能性もある。近現代磁器が墓内から確認されたため、本古墓が土砂によって埋没したのもそれ以降ということになり、比較的新しい時期に埋没し樹木が茂ったものと考えられる。

発掘調査及び資料整理にあたり、琉球大学医学部の土肥直美氏、中部日本鉱業研究所の井伊浩一郎氏からは人骨調査や銘書の判読について多大な御指導・御協力や貴重な玉稿をいただいた。また、浦添市教育委員会の安和良則氏からは古墓の形態的特徴による分類や蔵骨器の年代的特徴等について多大な御指導を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

(たまなは つとむ：西原町教育委員会)

(かたぎり ちあき：調査課 専門員)

(みやひら まゆみ：調査課 曜託員)

(さきはら つねひさ：調査課 曜託員)

(どい なおみ：琉球大学医学部)

(いい こういちろう：中部日本鉱業研究所)

【引用・参考文献】

- 安里進1997 「Ⅲ厨子甕の編年」『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－』
浦添市文化財調査研究報告書第25集 浦添市教育委員会
- 安和良則・仁王浩司2005 『前田・京塚近世墓群について－墓室編年試案－』沖縄考古学会定例会資料
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2001 『ヤッチのガマ カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に
係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集
- 西原町史編集委員会編1996 「西原の考古」『西原町史』第五巻・資料編四
- 翁長謙良1969 「沖縄における農地保全の基礎的研究（第1報）土壤浸食に関与する2,3の降雨特性について」『琉球
大学農学部学術報告』第16号 琉球大学農学部
- 翁長謙良1969 「沖縄における農地保全の基礎的研究（第2報）人工降雨による土壤浸食の実験的考察」『琉球大学
農学部学術報告』第16号 琉球大学農学部
- 鈴木治雄1982 『宝玲叢刊第五集 琉球風俗絵図』 宝玲叢刊編纂委員会
- 玉城京子2000 「第V章第14節 簪」『ナーチュー毛古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告
VII－』那覇市文化財調査報告書第44集 那覇市教育委員会